なると更に極端だ。運りに行る、見てると笑出したくなる程行る、宛然狂氣のやうだ。

朝起きて斯くの通りだから、少し不淨の度が激しくなると更に猛烈に行る。で、大抵定まつて居るのが、小用後の四回大用後の八回食後の十二回等で、男女相交るの後は必ず十六回の含嗽をしなければ止まない。

スードラと波羅門の仲の惡いのは、前に述べた通りで、大凡讀者にも其程度が解つたことゝ信ずるが、斯程に賤むスードラ所製の、乳酥と水と混じたものを平氣で飲む、是れ實に解すべからざることであるが、人の其理由を問ふに答へた波羅門の言に、乳は靈牛より得たるもの、是れ一切の不淨を清むるを得れば、何處迄お目出度いか、吾人は終に了解することができないのである。

此點迄書くと讀者は最う何物の語るべきものがないと思ふかも知れない、處が決してさうでない。

波羅門は他の種族と相接觸することを非常に嫌かる、何となれば彼等の習慣として、是を以て其身を汚されたりとなすからで、若し路上で他種族若くは外國人と相觸るゝやうなことがあると、夫こそ大變、家に歸ると直ぐ水浴する。夫で事落着に及ぶかと思ふと、決してさうでない、其折着て居た衣服まで洗濯しなければ止まない。從つて波羅門は大都熱鬧の地より、閑靜幽邃の境を擇んで住居する傾向がある、是れ實に止むを得ない自然の成行で、繁華な場所ではどうしても、他種族若くは外國人に觸るゝ機會が多いからである。

更に面白いのは彼等が土器を多く用ゐないことだ。だから食器には土器がない、譯を訊いて見ると、彼等には彼等想應の理窟がある、曰く、一度他人の手に觸れ若くは他人の唾液に汚されたるものを、再び使用することは不淨の最も甚だしきものだと。成程解つて見れば一面の道理がある、併し夫だからと言つて、箸の代用に五本の指を用る、皿の代りに木葉を綴るに至つては、其沒常識

も又甚だしと謂つべきである。

波羅門は一切の獸皮を以て不淨とする、尤も其内でも虎の皮及び羚羊皮は頗る清淨なものとしてあるそうだ、夫はさうであらう、吾輩は波羅門の僧が常に虎の皮を敷いて座つてるのを見たことがあるから……。

夫から衣服だが、植物の纖緯で織つたものは清淨なものと心得て居る。絹も彼等に取つては非常に清らかなもので、食事の際及び雜鬧の處に行く時などは殊にそうであるやうだ。

滑稽なのは醫者だ、波羅門の醫者がスードラ患者を診るときでも、スードラの醫者が波羅門の患者に接する時でも、必ず絹の布片を脈上に掩ふて診察する是れ直接にスードラの肉體に觸れ不淨を受くるを避けんが爲めであるのだ。

(十八) 天下の奇習

外國人を禽獸視する——波羅門の郵便配達——牛を殺すと地獄に墮る——

—拷問位は平氣なものだ——神樣の借金——神樣の病氣——馬鹿な信者——波羅門の五大罪——靈水浴の奇習

波羅門は己を持すること頗る尊大で、彼の中國若くは中華の民と號する支那人と能く似た點がある。

支那人が己れを除くの外は、悉く是を東夷西戎南蠻北狄と賤んだ如く、波羅門の輩は外人をバリアー族と均しく禽獸視して居る。バリアーは印度に於ける最賤最下の民で、スードラすら齒せざる程のものである。波羅門が外人を見ることバリアーに均しとは、其尊大も此に至つて極まれりと謂つべきである。

尊大は波羅門の通有性で必ずしも地位の高下貧富の差別に依らない、而も世界中で最も美しく最も勝れたる種族だと思込で居る。夫であるから如何に極貧な者と雖も、決して波羅門以外の家に奴僕となるやうなことはない。彼等は常に斯う言つて居る。曰く、外人の家に奴とならんより吾は寧ろ死を擇ばんと。

斯くの如く尊大であるにも拘らず、彼等の慾の深いことは非常で、此點に於ては慥かに支那人と伯仲の間にあるやうだ。從つて印度に於て富豪と稱する者其多くは波羅門の出である。一體波羅門は祖先傳來の貨殖の途を守つて怠らなかつたので、今日でも其種姓中に富豪が多い所以であるけれども、一には彼等が巧言令色、人の歡心を買ふに最も妙を得てるからで、回教徒が印度の主權を握つた時でも、今日の如く英政府司配の下にあつても、慾と相談では隨分彼等も其下風に立つことを厭はないやうである。

波羅門には種姓の特權があつて、如何に貧乏な奴でも、其身波羅門に屬するの故を以て、何處へ行つても大に威張つて居られるので、印度で郵便配達としては波羅門が最も喜ばれて居る。他の種姓では波羅門に威張られて行かれない處が多い。從つて迅速を尊ぶ這般の業務に往々非常な不便を感ずるからであるそうだ、妙な處で重寶がられるものではないか。

波羅門は官吏には喜んでなるが、慾の深い癖に商賣を餘り喜ばない處を見ると、其尊大性が慾に打勝つて居るのかも知れない。

どういふ譯か波羅門は牛乳牛酪酒類果實赤衣香料鹽豆類砂糖毒藥等の販賣業に從事することを許されない。貧乏な奴は洗濯屋になり飲料水の運搬位を生業として居る、尤も波羅門の衣服でなければ洗濯しない、飲料水も波羅門の家にあらざれば配達しない。

一國の風俗習慣に他國人の解し能はざる節のあるは、實に止むを得ざることなるが、日本などにも西洋人の眼から見ると、隨分變挺なことが多くあるだらうと思ふ。否吾人が歐米人を見ても恰度同じで、お互同士笑ひも笑はれもすべきものでないが、印度では其程度が更に激烈な樣に思はれる。

波羅門は波羅門以外の者が調理した食物を口にすると、直ちに其種姓の特權を奪はれ放逐されてしまう。是は解つて居る、平生波羅門が主張する主義から

見ても、正に然るべき制裁法であるやうに思はれるが、他人の物品を盜み、虛言を以て人を欺き、甚だしきは祖國を賣る腐敗漢も、將又人を殺すの惡漢も、決して一般社會から制裁もされねば擯斥もされない、牝牛を殺して其罪地獄に墮つるに値するといふ印度では、誠に以て不可思議の社會現象ではあるまいか。

吾輩は曩きに波羅門の貪慾飽くなきを語つたが、茲に再び其著明なる例證を擧げて、彼等の奸黠を惡むと同時に、波羅門以外下層の民の憐れむべき所以を知るに便しやう。

波羅門出の官吏が他種族の富者を見ると、直ぐ愚にもつかない罪名の下に拘引する。而して是に科するに異常の嚴罰を以てする、是は詮方なしに其冤罪に服せしめん手段に外ならないのである。然るに印度の民が無殘見るに忍びざる苦行を甘んじてなすが如く、其忍耐力の强烈なること天下比なしで、如何に嚴罰に處せられ、如何に極刑を科せらるゝも、彼等は決して夫を以て苦痛としな

い、併し其忍耐は己に叛いて罪に服するの恥辱たることを自覺した譯ではないので、服罪すると其財寶を沒收せらるゝから、夫が嫌さに忍び難きを忍んで居るのであると解つて見れば、一向難有くも何ともないが、氣の短かい日本人などには、眞似の出來ないのは勿論のことである。此に於てか官吏と冤罪人の根競べが始まる。若し官吏が其罪人の忍耐力に呆れてしまうと、直ちに無罪放免の恩典に浴することができ、罪人が根負けがして服罪してしまうと、其財產は否應なく沒收される。然るに茲に甚だ滑稽なのは、服罪した冤罪者には賞與として、衣服若くは帽子の類を與へて追放することである。

波羅門の官吏が斯の如く橫暴を極めると同時に、波羅門僧が狡猾で愚民の迷信に乘じ、種々な口實を設けて、愚夫愚婦の財布を搾るのである。彼等壟坊主の奸黠は誠に惡むべきものがあるので、鐵鎖を以て偶像の足を縛し、信徒に告ぐるに、此神嘗て某々に借金あり、返濟期限が過ぎても償却することができない

ので、債權者が來て神を縛すること斯の如く、どうしても今返濟さなければ、畏多くも此縛は終に解くことができないと、是を聞いた愚民共はスツこそ大變、吾等平常歸依する神がたかが借金のために縛められたのを放任したとあつては冥罰の程も恐しいといふので、甲は借金する、乙は質をおく、丙は親類へ泣きつくと、各々手配りし工面した金を寺院に上納すると、横着坊主竊かに赤い舌を出しながら、神體の縛を解て其金は己が懐に收めて知らぬ顔をしてる。是は彼波羅門僧が行る慣用手段で、其罪實に惡むべきものがあるではないか。

夫から尙一層滑稽なのは時々神樣が病氣になることである。

偶像の神樣は病氣になると、横着坊主共は其神體を病室に運び、種々の藥品供物を枕邊に列べ、時々其手を取つて脈搏を檢するが如き眞似をなし、參詣人でもあると態と憂慮さうな顏色をして、神樣の御容體は段々惡くなる、早く何とかしなければ大變なことになるかも知れないと話すと、其談話を聞いた奴が

歸つて近所近邊に吹聽する。何も知らない人間離れのした愚民共は、夫は只事ならじ早く見舞に行かずばなるまいと、手に手に供物を提げ寺院をさして駈付る、神樣の病室は是等と供物を以て埋まつてしまう。何しろ大變な騷ぎだ。能く坊主丸儲けといふが、實際坊主の仕事には資本が要らないから重寶だ、病める神に捧げた供物は一切坊主のものとなつて、さしも一時は危篤であつた偶像神の病氣は立どころに全癒してしまうのである。

印度の佛敎徒は一切の肉食を禁じてあつたが、波羅門には最初から是等の禁はなかつたそうで、當時波羅門が一切の肉食を禁ずるやうになつたのは、多分佛敎及び禪那敎の感化を受けたのであらうといふ話だ。一般にスードラは肉食するが、併し中には波羅門化された奴がないでもない。要之是等は波羅門を氣取つて居るので、スードラ中の波羅カラであるのだ。

印度では牛は靈獸としてあるから、牛肉でも喰ふものなら夫こそ物議の種と

なる、何しろ牛肉を食するものは、宗教的大罪を犯したもので、死んだら屹度地獄に墮つるものだとしてあるから、考へて見ると牛肉は喰べられない譯である。

肉食ができない位だから無論酒も飲めない筈である。併し内密では肉も喰へば酒も飲む、人里離れた田舎に居る奴は殊に然りで、唯發覺した時の制裁が恐しいから餘り盛に行らないだけであるのだ。

波羅門には五大罪が制定されてある、是れ佛教に於ける五戒のやうなものであらう。

一、波羅門を殺すこと
二、墮胎すること
三、耶子酒を飲むこと
四、竊盜すること

五、波羅門僧若くは其師事するところのゝ妻を姦すること、

等で、此五大罪を犯すものと相交るを以て、第六の大罪としてあるのである。

印度の教説に依ると一年に於ける一切の罪業は、靈水に浴することに依つて消滅するものとしてある。夫だから印度の諸地方には此靈水といふのが澤山ある。其中でも河で最も靈魂があるのは、恒河、信度、ゴタパリの諸川で、貯水ではスリヤ、チヤンドラ、インドラ、ブシカラニの諸水である。で、以上の河川貯水は靈中の靈たるものであるが、其他にも尙幾多の靈水があつて、其神靈の度合に從つて罪業消滅の期を異にして居るそうで、靈水に浴するの日は、日月蝕の日、夏至冬至春分秋分、新月滿月の夜で、是等の日になると男女の群衆が、相共に靈水に浴するので、其混雜は到底筆舌の名狀し得べからざる處で、毎年是がために數多の溺死者を出すに徵しても、其馬鹿らしさ加減が思はれるではないか。併し前に掲げた五大罪は、靈水に浴しても未來永劫消ゆるの時は

ないとしてある。

吾輩はカルカツタで綿絲よりなれる白繩を左の肩から右の臂に掛けた男を見て友人は其何の故かを訊ねて見ると、是が波羅門たることを表はす記章だそうで、彼等に取つては非常に重要なものであるとのことであつた。

で、此白繩は生れて五歳乃至九歳になつたとき、ウパナヤといつて極めて莊嚴なる儀式を以て、此白繩を掛くることを許されるので、要之彼等は此時始めて波羅門になつたのである。白繩は毎年八月、一定の儀式で新しくするが、勝手なる彼等は此時一切の罪業が消滅されるものだと號して居る。

以上說いた如く、あれ程仰々しい波羅門でも、何等かの罪に依つて一度其種族から除かれると、昨日の榮華は夢となり、如何に豪奢を極めたものでも、再び波羅門に齡せられざるのみならず、スードラでさへ最早之と語るを恥づるやうになるので、生きながら全然死人同樣な憂目を見るといふことである。

(十九) 波羅門の苦行

火焔に包まれて太陽と睨競べ——チデイ、マリの大苦行——毆られるのは前藝だ——戰慄すべき本藝——血の滝津瀨——赤熱の鐵棒を跣足で渡る——二本の針で唇を斜に刺して數十里を歩行す——總て想像以上だ

印度を旅行して歸つた人は、其土産話として必ず波羅門の苦行を語るであらう。吾輩も印度にある日其苦行なるものゝ現狀を見もし聞きもして、其慘狀に驚いた一人であるのだ。で、其普通の苦行といふのでさへ、我等人間には決して堪へ得べき底のものでないので、一本足で直立不動の姿勢を保つたり、無言の行をしたり、一木柱の上に兀坐したり、甚だしきに至つては四方に薪を燃し其炎々たる火焔の中央に立ちて太陽と睨競をする奴さへあるが、而も是等は波羅門に取つて、誠に朝食前のことであるに至つては、驚かざらんと欲するも豈

に得べけんやである。

吾輩は是から二三の猛烈な苦行に就て語らうと思ふ。氣の弱い人々は豫め氣絶でもしないやうに用意をして貰いたい。

印度にマリアムマといふ神樣があるそうだ。この神樣といふのが風變りで、殘虐酷惡の行爲が大好きであるが、此神を祀つた殿堂の前には、波羅門の來つて苦行し得べき道具が備へてある。其道具が又大變で、一本の横木の端に滑車が縛してある、其滑車を通した繩の末端に鐵製の鈎が附いて居る。此道具に依つて苦行することをチディ、マリと稱へるそうで、若し波羅門の一人が來つて波羅門僧に苦行の勸進がしたいと申込むと、僧は早速承諾して本人を臺上に上せ、大なる棍棒を揮つて其リを滅多矢鱈に毆りつける、而も是で事濟みとなるのではなく、愈々是から荒行に取掛るので、棍棒で毆られるのは僅かに其前藝に過ぎなかつたのである。

前藝でも吾人日本人には迚も耐へきれるものでない、愈々本藝に取掛るといつたらどんなことになるかと思つてると、苦行の本人の體には、滑車に通した繩の端に附けた鈎がプツリと刺されるのである。鮮血はさつと迸つて四邊一面唐紅、是でさへ並大抵の苦痛でないのに、這度は繩の一端を引張つて、鈎で刺した本人の體を高く中空に吊すのだ。何たる殘酷なる方法であらうか、而も苦行の本人は此時其苦痛のために、苦悶することも叫喚することも許されない、夫どころでなく苦痛の表情は些したりともしてはならぬ。印度人と雖も血の通つてる人間である以上、斯る殘酷い目に遇つては、其苦痛忍ぶべからざるものがあるに相違ない、而も十人が十人、肉は裂け血は滝津瀨と下つても、彼等は中空に談笑嬉喜して、苦痛の何物たるを知らない風を裝ふて居る。何と驚くべきではないか。

軈て適當なる時期を見計らい、波羅門僧は苦行者を地上に下し、其釣を拔き

傷口を縫合すと、茲に破天荒極まる大苦行は終るので、此時初めて顰面でもすることかと見てあると、イヤ〳〵決してそうでない、苦行者は嘆然として其家に歸り、而して目出度く苦行を終へたことを、親子兄弟鄉黨朋友に誇るのである。

吾輩は英政府が何故に斯る人道問題を等閑視するかと訊ねて見たが、決して放任して置く譯でないが、如何に嚴ましく干渉しても、彼等は絶對に夫に應じないそうで、今では有擊の英政府も呆れて、彼等のなすが儘に任してあるとのことであつた。

土人が病氣にでも罹ると、神に誓つて苦行をして其平癒を禱らなければならない。で、どんなことをするかと思ふと、赤熱した鐵棒を以て身體の諸部を焦き、自ら誓つた神の記號をつけるのである。吾等日本人が少し燒傷をした位でヤレ醫者を呼ベソラ藥を持つて來いと騷ぎたてるに比べると、其勇敢其忍耐眞

に感ずるに餘りがある。

更に驚くのは長さ二丈餘りの鐵棒を烈火の中に横へ、其赤熱するに及んで、其一端より他端に向ひ跳足の儘で駈足て渡るのがある。日本にある神習教の火渡りの式などは、彼等に取つては實にお茶の子さい〳〵であるだらう。

苦行の種類は實に二三にして足りない、更に聞く處に依ると、二本の鐵針を互に斜に上下の唇に刺し貫き、其針端をして左右の眼下に達せしめた儘、平氣で數十里の道を旅行する奴があるさうである。斯うなると普通の食事ができないから、僅かに牛乳其他液體滋養物を唇の空隙から流込み、夫で漸く生命を取止めて居るのである。

波羅門の苦行は事毎に吾等の相像以上で、迚も正氣の沙汰とは思はれないが而も其當人は更に大眞面目であるから頗る珍だ、吾輩は途上で針を鼻へ刺した奴も見たし、又吾と吾舌端を嚙截りて是を神に備へるといふ大馬鹿者も見た。

足一度印度に入ると誰でも實見することだが、繁華な街路で多くの男女が手を伸して、地上に平伏する態をなすのがある。是が又實に妙で唯一回で止めるのがあり、伸した手の届いた處に線をひき、其線上に立ちて再び手を伸して平伏する、斯の如く繰返しながら漸次前方に進んで行くのである。吾輩は最初何故に斯る奇妙なる動作をするものかゞ解らなかつたので、恰度カルカツタに佛典研究のために滯在中であつた某氏に就き、初めて其理由を知ることを得たので、夫は斯うである。

梵語にサ、アシタンガといふ語があるが、是は身體の八部を以てといふ意味で、即ち身體の八部を大地に觸れしむるといふことであつて、今では此奇なる行爲をサシタンガと稱へて居る、無論梵語のサ、アシタンガが訛つたのである。其八部といふのは双手兩足二膝胸及び額であるそうだ。尤も此サシタンガなるものは、往昔から一種の苦行としてやり來つたものであるのは勿論である

が、今では單に苦行の意味ばかりでなく、尊敬若くは制裁の意味にも用ゐらるるそうで、子が親に對する時、臣下の帝王に對する時、スードラの波羅門に對する時、サシタンガは實に尊敬の意味に於て行はれるので、寺院詣でに是をなしつゝ寺門に達するのは一種の苦行で、波羅門から破門されたものゝ中で、其罪の輕い奴はサシタンガを行らされて、一定の時期を經たる後其種族に復歸することを許されるが、此場合に於けるサシタンガは一種の制裁法であるのだ。

(廿) 亂暴極る宗教的儀式

杯盤狼藉——姦通隨意——醜態見るに忍びず——神婢は僧侶の妾——片手間に他人の枕席に侍す——亂暴なる御託宣——熱鐵を以て神妻の臀部を灼く——イヤハヤ驚くの外はない

印度の宗教的儀式の中には珍しいものが澤山あるが、其中でも吾人の眼に最も奇異に映ずるのは蓋しシヤクチ、プージャであるだらう。

シャクチ、ブージャの意味を或印度通に訊くと、シャクチとは女性の神様でブージャとは歸依崇拜の意味である。故にシャクチ、ブージャは女神に歸依し是を崇拜するの儀式であると説明して居た。で、此儀式の最も盛に行はれるのは、印度でもベンゴール地方で、印度教の大部分は大抵是を行ふといふことである。

儀式は極めて秘密的なもので、施行の時期は大抵夜中で、一切他宗派の者は來り會することを許さない。

平時波羅門がスードラ族を賤むこと、恰かも禽獸の如きものがあるが、此シャクチ、ブージャの時だけは、決して種姓の別を問はないので、波羅門もスードラも一堂に相會し、美酒佳肴を置て互に歡樂をほしいまゝにするのである。此時は肴の中に牛肉もあれば其他の肉もある。飲料はアラック、耶子酒、阿片等が出されるのである。

儀式の主人公は印度教徒たる波羅門で、スードラなどは其招待を受けたお客樣である。式が始まるに前ち、主人公は一切の御馳走を偶像の前に陳列し、然る後主人がお毒見をして列坐の客に頒つ、スルト其客は酒なり肴なりを受け自分でも喰つて、其殘りを次の客に與へる。次の客が喰べて尙殘れば次へ次へと廻すので、なくなつた處でやめて更に新しいのから廻食を行るといふ風に、酒も肴も盡くる時がないので、此日に限つて長幼男女の差別は認められない。平常人間と思はれないスードラの口から、例の尊大なる波羅門が食を奪ひ、婦女は男子の手から酒を貰つて、キャッ〳〵と騷ぎ狂つて居る。實に無禮講の最も極端なものである。

宗教的儀式として此位亂暴ならば既に澤山であるにも係らず、落花狼藉たる有樣は中々此邊で止まらないので、彼等が喰ふだけ喰ひ飲むだけ飲んで酩酊滿腹してしまうと、更に見るに忍びざる醜態は演出されるのである。

見るに忍びざる醜態とは何ぞや、彼等男女が相擁し相抱き猥藉たる杯盤の間に仆れて居ることで、夫は其妻が他の男子に擁せられて居ても、決して呼ぶことを許されない。又未婚の愛娘が年若き男子と共に倒れて居ても、其親は決して其娘を叱責することができない。であるからして平常禽獸視せらるゝスードラやパイラの男子は、此機を利用し波羅門の妻を姦し、波羅門の娘を恥かしむるを以て無上の愉快として居る。何しろシャクチ、プージャの晩だけは一切の階級が撤排せられ、一切の婦女は一切男子の共有になるのだから、其亂暴さ加減は大凡想像せらるゝであらうと思ふ。

日本の神社には御子といふのがあるが、印度の寺院にも是に似た神婢といふのがある。毎日の仕事も御子と同じやうで、朝夕兩回神前で歌ひ且つ舞ふのである。

神婢は種姓の如何を論ずることなく採用されるので、中には高貴の家から出

たものもあるそうだ。で、其主なる職業は前に述べた神前の歌舞であるが、其副業として結婚其他重要なる儀式のある時は、私家の招きに應じ其場に出席して歌舞するのである。寺院の大小に依つて神婢の數を異にするが、普通の寺院では三四人乃至四五人、大寺院になると八九人乃至十三四人で、往々廿人近くも蓄へてる寺院もあるやうだ。

殊勝氣に構へて神前に仕へてると神婢も難有味があるが、其裏面を覗いて見ると悉く是は波羅門僧の妾であるのみならず、規定の金さへ拂へば何人でも是を買ふことができる。要之神婢は一個の賣女で、日本の淫賣婦と同じやうなものである。

純潔なるべき神婢が波羅門僧の妾となつて媚を呈するさへ一大怪事であるに而も尙ほ一般遊冶郎の求めに應じて、其枕席に侍べるに至つては、吾人其亂暴に驚かざるを得ないのである。

何故に彼等は片手間に醜業を營むか、是れ屹度依つて起る原因があるに相違ない、能く聞いて見ると果してある。元來神婢は寺院から一定の手當を給せらるゝのであるが、夫だけでは到底生活することができないので、止むを得ず淫を賣るのである。

印度の婦人が懷胎すると、神に誓つて曰く、生れたる子若し女ならば是を獻じて神婢となさんと、是れ安産を祈る報酬であるので、若し果して其子が女であつたならば、どうしても寺院に獻じて神婢とする義務がある。而も印度婦人は其生みたる女兒を、神婢にすることが其母たるものゝ最大名譽であると心得て居るから堪らない。

波羅門僧の奇習は單に神婢を姦するに止まらない、吾人の眼から見ると實に怪しかる所行を敢てする。吾輩は在印の友人に次のやうな談話を聞いて、撫然として印度のために長大息したのである。

事はカルナチックのチルバチ寺院に關する話なので、元來此チルバチ寺院はヴキシヌ神を祀つたもので、一年一回極めて盛大なる祭典が施行される。此時は近鄉近在から祭典の盛儀を見るべく、男女老幼が絡繹としてチルバチ寺院に集まつて來る、スルト波羅門僧はヴキシヌの神體を盛裝し、之を神輿に乘せて群衆中を徘徊するのである。是迄ならば少しも怪しいことはないが、軈て僧は群衆中の最も美しき一少女を撰擇し、其夫若くは其親に告げて曰く、神は汝の妻若くは娘と結婚せんことを望み玉ふ、汝應さに之を神に獻ぜざるべからずと。

天下是程亂暴な御詫宣があるだらうか、多少の智識あるものは直ちに之を拒絶して應じないが、無智蒙昧迷信に囚はれたるものは、其託宣を疑はざるのみならず、神と婚する、吾家の名譽是に過ぎたるはなしと、直ちに其愛娘若くは其愛妻を獻ずるのである。

斯の如く名は神に獻ずるのであるが、其實は波羅門僧の姦するに任すので、

是程馬鹿氣きつたことが又と此世にあるものでない、而も愚民は其然る所以に思到らないで、狡猾獰惡なる波羅門僧の亂行に隨喜の涙をこぼして居る、何と憐れむべき民ではないか。

チルバチ寺院には斯の如くにして獲たる神妻が隨分澤山居るが、若し此神妻が年老いて再び神を樂ましむることができないやうになると、神は波羅門僧を介して神妻に離婚を申込む、といふのは僧の口實で容色衰へ淫樂又薄くなると、波羅門の糞坊主は如上神の託宣に擬して、體能く寺院を追放するのである。處が茲に最も殘酷なるは、神妻を追放するに當つて、僧は赤熱したる鐵棒を以て、女の臀部若くは胸に神の記號を畫き出す、而して此記號は永く神に仕へて忠實であつたことを表彰する所以のもので、神妻たりし女も亦之を以て最大の名譽とするのである。

神妻を姦したる波羅門の糞坊主に、秋風立ちて斯く寺院を追放せられたる女

は、カリ、ユガ、ラクシミーと稱して地方を徘徊巡禮する。然るにカリ、ユガ ラクシミーが地方の信者に持囃さるゝことは頗る非常で、彼等は決して生活に苦しむやうなことはないのである。

序だからデヴアリ祭のことを書き添へて置かう、是は印度に於ける年中行事の一で、燈明祭とでも謂つべきであらう。毎年十一月新月の日が其當日である。恰度此頃になると收穫が終るのであるから、農夫は田圃に行つて收穫物に羊だとか山羊だとかを供へ、其善く成熟したことを感謝する。又肥料を堆積した處へも、花を飾り燈火を點じ米若くは果物を供し、其前に平伏して今後尙ほ能く田圃を肥さんことを祈るのである。

テヴアリ祭の當日市中は徹夜燈火を點じ、日本に於ける緣日の如く夜店がたつ、人出は無論多い、それに驚くのは此晩に限つて男も女も相集まつて賭博を行ることである。一體印度といふ國は古來博奕の非常に盛大な處で、詩歌など

博奕を題として詠つたのが澤山あるといふことは。波の有名なマヌの法典には明らかに博奕を嚴禁した條項があるといふ話だから、最早其頃から盛に行はれて居たものと思はれる。

祭禮の翌日、市中の各戸は門を鎖し一切の業務を廢し、男女老幼相携へて恒河に至つて沐浴するのを例として居る。

（廿一）珍談餘錄（一）

貝葉と鐵筆――貨幣代用の貝殼――印度に於ける惡疫流行の原因――白いのが好かれるか、黑いのが珍重されるか――厄介な鼻環――痩せこけた印度の牛――一頭で二四五十錢乃至三四だ。

印度には貝葉といふものがある、鐵筆で以て是に字を書くのである。貝葉には二種類あつて、其一は幅員二寸長さ二尺弱で、他の一種は是に似て今少し大形であるだけである。併し小形の貝葉に比べると、其質が左程堅牢でないから、小形のが多く得られる地方では大形のは餘り使用しないやうである。

中央印度には貝葉がないから緒紙を使用する、併し是とても往古からあつた譯でなく、蒙古人が侵入して初めて其製法を傳へたのである。で、又此地方になると、日本の小學生徒が使用する石盤のやうなのを用ゆるさうで、どちらかといへば緒紙より石盤の方が流行するといふことである。

鐵筆は長さ三四寸から六七寸で、其一端は尖つて釘のやうになつて居る。他端は種々な裝飾を施したり又た小刀代用をさせて居るのがある。

印度人は決して机といふものを用ゐないから妙で、大抵は床上に蹲踞して書くのが習慣である、實に何とも爲體の解らない輩である。

未開の時代には日本にも此習慣があつたに相違ないが、印度では現今でも貝殼を貨幣の代用にする處がある。カルカッタ博物館には古代使用せられた貨幣代用の貝殼が多く陳列してある。

印度の貨幣はルーピーが一番大きいもので、日本にあつた一圓銀貨に相當する處だが、あれよりは少し價格が低いかも知れない、其次が半ルーピー、四アンナ、二アンナの小銀貨で、一アンナはルーピーの十六分の一である。銅貨にはパイサーがあるのみで、四パイサーが一アンナになる。日本の一錢銅貨といふところだ。

印度人は貝殼を貨幣に代用する如く、總ての點に於てお目出度い國民で、英國政府も隨分世話の燒けることであらう。其一例として茲に印度に於ける貯水池のことを話さう。

印度では到る處貯水池の設備があるといふことは讀者の既に知る處で、改めて茲に贅する迄もないが、元來此貯水池なるものは、隨分以前からあつたものらしく、古代の貯水池で荒廢に歸したのが非常に澤山ある。

貯水池も大小があつて大きいのは湖水の如く、小形のは井戸位なもので、其

深さは二三丈から四五丈に達する、かなり深いものである。

往昔の貯水池は沐浴洗濯飲用と、各其用途に依つて劃然たる區別があつたものであるが、今は夫が亂暴になつて、同一貯水池で沐浴したり洗濯をしたりする、而も其水を平氣で飲んで居るから驚かざるを得ない。往昔の飲料專用の貯水池は山間の雨水と泉水とを濾してつかつたので、メガステチースは印度人を以て、世界で最も清淨な水を飲む民だとした位であつたのが、前言ふ通り沐浴洗濯飲用共悉く同一貯水池のものを使用するといふ有樣であるから、果然印度には惡疫が流行し始めた。殊に祭事ある日などになると、一村の老若男女が擧つて沐浴するので、數日の中に全村悉く惡疫に罹ることなどがあるので、英國政府も非常に憂慮して、此頃では嚴重しく言つて弊風改善に力を盡して居るのである。

印度では婦人の色の黑いのを好むか、又は白いのを美人とするかといふ問題

は、吾人の印度に入らざる以前には時々胸に浮んだことがあつた。一體印度人といへば色が黑いに定まつて居るから、自分だけには色の黑い方が珍重されるかも知れないと思つた。併し又斯うも思つた。若し印度人にして多少の審美眼があるとすれば、黑い方より白い方が美しいに相違ないと、孰れにしても解決困難な問題だから、印度に入つたら早速訊ねて見やうと思つたのである。ところで黑白果して何れを美人とするかと訊て見ると、印度に於ては銅色の婦人を以て最も美しいとしてあるといふことが解つた。即ち黑と白を加へて二で割つた色が最も喜ばれるので、餘り黑過るのやあまり白過るのは美人でないのだ。

赤道直下だけに黑過る方は掃き捨てる程あるが、白過るのがあるといふのは疑はしいと思つてるとさうでない、往々南歐の婦人を欺くばかりの白いのがある。日本では色の白いは七難隱すといつて、女性羨慕の中心になるのであるが、恰度印度の銅色が日本でいふ雪を欺くといふところにあたると見え、夫以上白

いのは天刑病の素質があるものだと稱するところが、恰度吾國でいやに變挺に色の白いのは癩病だといふのと能く似て居る。して見ると印度で銅色の喜ばれるのは、日本で色の白い美人が珍重されるのと同じ理窟になるのかも知れない。

腕環耳環は歐洲婦人でも行ることだから左程珍しくないが、印度の男女は此外に足環頸環鼻環などを欲めて居る。吾人は是を見ると一種不快の感に打たれるが、風俗といふものは妙なもので、是等は悉く裝飾の目的で欲められて居ると聞いては呆れるの外はないのである。思ふに身體の諸部に金屬製の環を欲めるのは慥かに野蠻の遺習で、其證據は世界到る處の蠻民に此種の風俗のない處はない位で、歐米人が耳環を欲めるのは、彼等の祖先中是に似た風俗があつたもので、食事や住居の方法と共に、慥かに其祖先があまり上等人種でなかつたことを證明するのだ。然るに吾日本人は決して斯る不自然な眞似をしない、唯日本で此眞似をするものを求めたならば、囚徒の足環と牛の鼻環位なものであ

る。

話が思はず脇道に外れたが、要するに印度人は身體の諸部に環を嵌めて得意として居るので、腕環や足環の如き多きは七八個乃至十個を嵌めて居るのがある。併し足環には決して黄金を用ゐない、是れ啻に貴重なる金屬であるの故ばかりでなく、彼等は黄金を以て神聖なものとして居るのであるから、足部の裝飾に用ゐて是を瀆すに忍びないのである。

吾輩は印度人の嵌めた大形の鼻環を見る度に、天下是程厄介なものはあるまいと、思ふのが常であつた。何しろ鼻腔の隔壁に嵌めて頤まで垂れて居るのだから、就中食事の時は困るだらうと人に訊ねて見ると、其人曰く、乞ふ意を安んぜよ、彼等食事するときは、片手で是を支へ、片手で食を口に運ぶのであると。

處變れば品變るとか、日本では倶利迦羅紋々と稱し識者の排斥する文身も、

印度美人は以て唯一の裝飾として居るのである。だから顔の色のあまり黑くない婦人は、頗若くは頤に四五點の文身を施して、顔面の美を添えることにつとめて居る。

牛の鼻環が引合に出たから、吾輩が嘗つて印度の牛の瘦せて居るのに驚いた話しをしやう。

赤道附近沃野千里、牧草常に野に滿ちて居るだらう、從つて其飼養する牛羊の如何に肥大なものであらうかと思つたのである。ところが實際印度の牛を見るに至つて實に驚いてしまつた。

印度の牛は何故に斯の如く瘦せて居るのか、是れ吾輩の了解し能はざる疑問であつたのだ。後に至り人の語るのを聞いて始めて其理由を解した。

印度の牛は瘦せる筈である。何となれば一家に多きは數百頭、極貧の者と雖も必ず數頭を飼養をして居る。併し水利の便がないために牧草も思つた程澤山

ないところへ、厄介にも彼等は牛を靈獸と稱して決して屠らないから、其數は年々蕃殖するばかりである。で、又一頭でも多く飼養するのが彼等の誇りであるからして、一頭でも多からんことを望んで止まない。從つて飼料は常に不足勝ちで、殊に酷暑の期節になると牧草は一切枯れて用をなさない、止むを得ないから一種の泥土に鹽水を混じて牛に與へる、是では牛の肥る道理はない筈である。夫だから價格も非常に安價い、一頭五ルーピー内外だといふから、吾二圓五十錢から三圓二三十錢である。日本では牛肉を喰いに行つても其位直ぐなくなる。まるで嘘のやうな話たが、實際だから詮方がない。

(廿二) 珍談餘錄 (二)

印度人の繁文褥禮——妙な挨拶——血族結婚は平氣だ——寡婦の再婚は絶對に不可能だ——嚴酷なる姦婦の制裁法——殉死——殉死者は祀らる——葬式の泣女

繁文褥禮は印度人の特色で例の本家の支那に讓らない程である。從つて書簡の體裁には嚴重しい規程があつて、上下尊卑の差別に依つてめんどう臭い書方がある。殊に吾人が驚くのは書簡の冒頭に書いた敬語で、僅かに二三行で尼りる用件も、是あるがために恐しく長々しい書簡になるのである。其一例として人の示すのを見るに

尊者、波羅門尊者、大波羅門、尊者が德の高きは大須彌山の如く、尊者の智は四吠陀に涉獵して餘すところなし、其積德善業の餘映、輝けること日輪に似たり云々

と其空々しき諂諛に至つては、實に驚くの外はないのである。斯の如く長い前提が二三葉にも涉つて、肝腎の要件は最後の二三行で濟むといふことだが、何から何まで彼等のすることは、狂者じみたことばかりである。日本などでは最後に、御令閨に宜敷御傳聲とか、奥樣に可然とかお世辭を書くのが普通だが、

印度に於ては正に是と反對で、書中に妻君の事でも書いたものなら、殆んど許すべからざる無禮と見做される、何と厄介千萬な國ではないか。

書簡の前提が二三葉の長きに渉る程であるから、印度人が其長者に對する禮讓の厚い位は何の不思議もない筈である。人若し路上で長者に遭遇したとする、彼は必ず路を避け長者の通過し終るを待つて歩きだすだらう。若し夫人馬上若くは輿に乘じて長者に出會すれば、必ず其乘物を捨て路傍に佇立して、其通過を待たなければならない。賤民が長者と語るとき、其右手を以て口を掩ふは、口臭唾液の長者を穢さんことを恐れてゝある。日本でも封建時代に諸侯に對して土下座をしたが、印度の賤民は長者に對して、必ず其履物を脱して敬意を表明しなければならない。

日本でも人と談話するとき、兩手を背後に廻すのは失禮だとしてあるが、波羅門でも是と同じで、長者に對して語る時などは、決して斯る態度を取つては

ならぬ。併し波羅門の尊大主義からして、西洋人との談話中敬意に兩手を後に廻して語る、而して談果つるの後、其西洋人を輕侮したことを周圍に誇るのである。

印度の或地方では長者に遭遇した時、諸肌脱ぐのを以て禮とする處があるといふことだ。

何と言つても印度は妙な國で、印度人は妙な國民である。其久濶を序する挨拶の風變りなのは、殆んど世界一品古今獨歩であらう。日本ならば久しく會はなかつたのが偶々遭遇すると先づ第一に先方の健康を祝するのが常であるが、印度で夫が反對だから驚かざるを得ない、吾輩茲で印度人の聲色を使つて見せやう、假りに吾輩が印度人で舊友に久振りで會つたとして。

「よう君、大層衰へてしまつたね、君の顏色などゝきたらないよ、全然で骨と皮だぜ、一體どうしたんだい、いやに身長ばかり高くなつて、ハ、ア成程君

は非常に猛烈な病氣にでも罹つてるんだね……」とまア一寸這麼風な挨拶であるそうだ。而も先方の健康が舊に倍して良好の狀態になつても、イヤ夫ところが殺しても死ないやうな奴に對しても、頭から骨と皮だよなどゝいはなければ、先方の御機嫌が惡いのだから、唯々呆れて口あんぐりの外はないのである。

一體野蠻人は血族結婚を平氣で行るが、印度人は是を平氣で行るといふより寧ろ大に其方を尊ぶ風がある。

印度の同姓は更に數百の小種姓に分れて居て、而も其小種姓は互に相結婚することができないので、止むを得ず近親結婚の弊を釀すやうになる、殊に他種族と結婚でもしたことが發覺すると、夫こそ大變で、直ちに種族から追放されてしまう。此制裁法が近親結婚を盛ならしむる他の有力なる原因であるのだ。

日本では往々いとこ同士の結婚があるが、印度のは更に激烈で、從兄が從妹

を娶る位は無論平氣であつて、甚だしきに至つては叔が姪と夫婦になるものさへある。而も夫が事情上許されてるのでなく、姪を娶るのは叔の正當の權利として承認されてあるから驚く。

斯の如く痛快に血族結婚を行る習慣であるに拘らず、茲に多少の除外例があるから面白い、即ち兄弟の子は姉妹の子と結婚する權利があるが、兄弟の子同士若くは姉妹の子同士は相娶る譯に行かない、是と同時に母方の子孫と父方の子孫とは、相互に結婚しても差閊がないか、母方の子孫同士若くは父方の子孫同士は絶對に夫婦になることが不可能である。

歐米人の家庭は夫婦本位で、父子兄弟相互の愛情は非常に淡い、印度が是と似て父子兄弟間の情は頗る淡白なものである。是といふのも宗教的感化が預つて力あるので、往昔から印度では父子相殺すやうな悲慘事が絶えたことがない。父母生存の間は兄弟間多少の情愛がないでもないが、一朝父母が此世を去

つてしまつたら、最早其間は他人も同然で、双方に如何なることがあらうとも敢て見向きもしないとのことである。

戰爭のある度毎に日本の社會には幾萬といふ寡婦ができる。殊に日露戰役後は一層激烈であつた。併し斯の如き多數の寡婦の中で、貞婦兩夫に見えすと頑張つてるのが果して幾人あるだらう。イヤ例令口に殊勝なことをいつて居ても其實いかゝわしいのが隨分あるやうであるが、口の惡い川柳氏が是等假面を被つた婦人を痛快に罵倒して居るだけで、社會は敢て寡婦の再婚を怪しまない、是點に於て日本の寡婦は其自由を謳歌して可なりだ。

印度の寡婦は悲慘なものである。妻が夫に死なれたが最後其寡婦は最早人間交際ができない、況んや再婚に於ておやで、否でも應でも頭髮を剃し一切の粧飾を斥けて、謹愼の態度を保たなければならないのみならず、一切の儀式に出席することができない。で、若し寡婦が何等かの事情に依つて出席するやうな

ことがあつたとすると、非常に不吉の兆として人々の恐怖するところとなるのである。

印度では寡婦が絶對に再婚しないかといふに、強ちさうでもないので、中には少し生意氣な婦人になると、習俗を無視して隨分結婚するやうなことがある併し社會の制裁は直ちにかゝる再婚婦人に向つて襲來する、即ち寡婦として生きてるよりヨリ以上猛烈に他の擯斥を受けるのみならず、再婚した寡婦を出した家名は、是に依つて再び雪ぐ能はざる恥辱を被るので、實に嚴重なものである。斯の如き有樣だから再婚したいと思つてる寡婦も、社會の制裁か恐しさに嫌々ながらも寡婦生活を續ける。如何に年が若くても如何に美しい容色を持つて居ても、最早今日では再婚などゝはおくびにも出さないやうになつて居る。英政府は切りに再婚を奬勵して居るが、其結果は餘り思はしくないといふことである。

下世話に姦通は七兩二分と能くいふが、日本でも或時代には七兩二分どころか、極めて酷烈な制裁を加へたことがある、印度がさうで、婦人が其節操を破つた場合には、まづ印度人の最も恥辱とする剃髪をして、然る後姦婦を驢馬に乘せる……乘せるときは後向きに……兩手に泥土を盛つた器を持たせ、而して市中雜鬧の間を引張りまわす。是を見た群衆はあらゆる冷嘲熱罵の辭を浴びせかける、のみならず犬猫羊牛豚の糞を投じて之を恥しめる。で、最後に其種族から追放するのである。

日本にも往昔は殉死が流行したが、印度では現今でも之を非常な名譽として居る。尤も印度でも太古から此制があつた譯ではないが、中世波羅門が經典を誤解して造りだしたので、爾來今日まで盛に行はれつゝあるのである。併し回教徒が印度の主權を握つた時代には、法令を以て殉死を禁したけれども、少しも其功果は現はれなかつた。中には官吏に贈賄してまでも殉死をする奴さへあ

つたといふから、後世英政府の極力是が全廢を計らんとして、却つてベンゴール一帶の地に大動亂を引起さんとしたのは無理もない話である。其後でも百方力を盡して惡習の改善に努めたが、今日尙ほ禁を犯す奴が無數であるといべば殉死に於ける彼等の信念が如何に深いかゞ解るであらう。

殉死は寡婦が多く行る、是はさもありそうなことで、生殘つて社會から冷遇されるより、彼等は寧ろ死を擇ぶかも知れない。で、加之殉死したものは神として祭られるといふ迷信から、其間には愚民の宗教的狂熱が手傳つて殉死するのであらう。記錄に依ると千七百六十五年から千八百廿九年に至る六十四年間に、殉死した男女の數が七萬人の多きに達したそうである。無論是は不完全極まる統計で、此外に幾千萬人の死者があつたか容易に知り得べきでない。

若し殉死者があつたとすると、遠近傳へ聞き千里の道を遠しとせずして、其墳墓に來り詣で、其德をたゞへるのである。數婦を有する夫が死んだ場合には

殘れる數婦が悉く是に殉する必要はないので、其中の一人若くは二人が其選に當ればよい。で、其人選は波羅門僧が本人の供述を聞いた上で定めることになつて居る。

殉死の事を話したから序に葬式のことを述べやう。

印度では人が死すると大抵は火葬にする、中にも火葬を嫌つて土葬にするのがないでもないが、大體としては火葬が一般に行はれて居るやうである。俳し火葬場といつても別に完全な設備がしてある譯でなく、積上げだ薪木の上に死體を收めた棺を乘せ、油を注いで點火する、唯夫だけである。で、燒けてしまつたところで遺骨は拾つて金屬製の罐に收め、彼の靈河たる恒河に投ずるのである、從つて恒河の邊りには火葬場がいくつとなくあつて、死體を燒く煙が一年中絶へない。

火葬の次きが土葬でスードラの大部分とシヴァ教徒が是を行るが、火葬土葬

の二法を除いては水葬が最も便利で、死屍を引擔いで其儘恒河の流れに投じてしまう。是なら成程費用が要らなくて至極輕便だ、火葬のきらいなスードラの中で貧乏な奴が、此水葬法を用ゆるのは無理もない話である。

以上火葬でも水葬でも土葬でも、印度人は死者のために墓を建てることをしない、唯墓あるのは夫の死に殉じた妻ばかりで、前に述べた通り殉死者を尊重するためである。

葬式をすましたから一つ泣女のことを話さう。

朝鮮支那を旅行した人は、其葬式の行列中に泣男といふのがあつて、オイオイ泣きながらねつて行くのを見たであらう。印度が是と似て泣女といふのがある。死人があると金を出して泣女を傭入れる、スルト傭れた泣女は頭髮を亂し半裸體となつてやつてきて、死人の周圍に群集して大きな聲を張りあげて泣く喚く、中には故人の德を賞めそやし、何故に斯く早世したであらうなどゝ、さ

も悲哀の極に達した風を裝ふて號泣する。で、死人の仕末がついてしまうと、賃錢の支拂を受け大喜びで歸つて行く、其現金なこと恐らく天下に其比がある まい。

(廿三) 迷信で凝固つた印度

英國政府の苦心——印度の教育事業——印度人の英人を惡む所以——牛肉を食ふべからず——狂的迷信——馬鹿げきつた經文——牛糞を喰ふ——滑稽極る年中行事

印度を見てきた人は誰でも其社會狀態を改良せんとする英政府の苦心を諒とするであらう。

元來印度は農業を以て立つた國であるにも係らず、無頓着で迷信に凝固まつて加之なまけ者の印度人は、最も力を入れる其改善を計らなければならない灌漑法などを、少しも構はないで放任して置くから、折角祖先が造つた貯水池も

漸次荒廢に歸してしまつて、少しでも旱魃すると忽ち飢饉だ。吾人は印度の飢饉を餘り屢々耳にしたので一時は不思議に思つたが、譯が解つて見れば一向不思議でも何でもなし、寧ろ印度人に對する天公の適當なる制裁といつてよろしい位なものだ。萬事が斯の如き有樣だから英政府の世話の燒けること夥しい、あれだけの土地を横領して見れば、有繋に自然の成行に任して知らぬ顏の半兵衛もきめられないので、大枚三千萬圓も投じて灌漑設備の完成を計つた。是で近來一千三十餘萬エーカーの地を灌ぐやうになつたといふことである。

教育も英政府のお蔭で段々盛大になつてきたやうである。印度の教育事業を語るにはウアレン、ヘスチングの名を忘れてはならぬ、ヘスチング氏の印度總督たるや、從來教育が波羅門僧侶若くは富豪の子弟の間にのみ限られたるを慨し、一千七百八十一年始めてカルカッタに學校を起し、一般庶民を教育せんとしたので、是から漸く諸種の學校が起つて來たのである。で、今ではカルカッ

タ、マドラス、ボンベイには印度大學があつて、文學法律醫學工學を授け、ラホールにも一大學を見るに至つた。其他專門學校高等學校師範學校中學校女學校小學校と、外觀だけでも教育は非常に盛に行はれてるので、印度固有の美術を發揮せんためには、前記大學所有地に美術學校があつて、鋭意其目的を達せんとしつゝあるのである。

併し是は外觀だけで其内容は全然お話にならない、大學生で目出度卒業迄こぎつけるのは僅かに其十分の一に過ぎない、專門學校も平均百人の生徒を收容して僅かにお茶を濁して居る有樣だ。他は推して知るべしで、就中女子教育などゝくると、誠にハヤあわれなもので、西北諸州千五百萬の女兒を有しながら其内就學するもの僅に七千に充たない。印度の開發は到底難事業である。

英政府が斯の如く印度開發に全力を盡して居るにも係らず、彼等土民は一向無頓着で、難有いとも思はなければ御苦勞だとも思はない、夫のみか却つて英

人を惡むこと甚だしい、尤も英國に其祖先の國を奪はれたのであるから、印度人に英人の施設が快かるべき筈はないが、而も彼等印度人が英人を惡むの所以のものは、決して愛國的原因からでなく、單に一種の宗教的迷信であるといふに至つては、誠に憐れむべき輩ではないか。

宗教的迷信から英人を惡むに至つたとは、實に解すべからざる妙な話のやうであるが、彼等に取つては決して不可解でも妙でもないので、夫は斯ういふ譯なのである。

印度四姓の民は上は波羅門から下スードラに至るまで、牛を以て靈獸として居るから、牛肉といふものを決して喰はない、若し牛肉を喰つたものは直ちに地獄に墮つるものだとしてある位だから、いかに四姓の民が牛を尊重するかゞ解る。然るに英人は其靈獸たる牛を殺して、毎日食膳に上すときてるから堪らない、彼等は最早英人を人間視しないやうになつたのである。夫と今一つの原

因は、英人がパイラを其家庭に使用して居るからである。パイラは賤族スードラの下に位し、波羅門は勿論スードラと雖も、是と齢することを恥づる位だから、其パイラと共に住んでる英人は、自然印度人の眼にパイラと同じに映ずるのである。尤も英人と雖も最初よりパイラを使役したくはなかつたのであるが毎日其食卓に牛肉が上る仕末だから、スードラ以上の輩は宗教上の迷信からどうしても來てくれなかつたものだから、英人のパイラを使役するのは實に止むを得ざるに出でたので、尙一層印度土民の惡むところとなつたのである。

斯の如く印度は迷信の國である。夫であるから國内到る處奇怪なる偶像を以て滿たされて居る、寺院は勿論原野路傍家の内外偶像の陳列せられざるところなしで、宛然偶像の展覽會場にでも迷込んだやうである。

印度の迷信はすべてが狂的である。田舍の方に行くと巡禮者と稱するのがあるが、是は男女の一群から成立したもので、多くは中流社會のものであるとい

ふが、見てると其中で重立つたのが樂器を構へこんで、何だか譯の解らないことを言つてる。夫がすむと其樂器で以て賑かに囃立てる、今迄靜肅に聞いて居た男女の連中が、遽かに氣でも狂つたやうに躍りだす、中には感極まつてオロオロ泣く奴さへある。田舍の村には波羅門の僧侶が居るのは無論だが、能く聞くと其僧侶には二種類があるそうで、其一種は冠婚葬祭、善惡吉凶の判斷、播種收穫の時期を定めることなどが其職業で、彼等は是に依つていくらかの報酬を得、以て生活の資に供するのである。毎年九月になると農夫共は、靈河に浴して其罪を清めなければならない、之をチルトといつてるそうだ。併し遠僻の地靈河に赴くことのできない農夫連は、其地方の波羅門の僧侶が代つて靈河の邊に赴き、其右足を浸して持歸つた靈河の水を、難有く頂戴することに依つて其罪を清めるのである。で、波羅門僧が右足を浸す譯は、經文に宇内の靈河は悉く海に朝宗し、洋中の靈水は悉く波羅門の右足にありといふ文句があるか

らであるそうだ。

夫から今一種の僧侶は寺院内に棲んで居て、毎日神棚を粧飾するのが役目である。殊に噴飯に堪へないのは、毎日牛の糞を以て牀を清めることである。いかに靈獸とはいひながら、其糞を以て牀を清めるに至つては、實に何とも驚き入つた次第である。何しろ男女根を崇拜したり、牛尿牛糞を食つて其罪業消滅を祈る輩だから、事毎に吾人の想像以上である。

印度位祭禮の多い國はあるまい、殆んど天下無比であらう。其主なものとして、

(一) マカル、サンクランチ、是は一月十二日に擧行する祭禮で太陽は恰度此日を以て南より北に赴くといふのから起つたそうだが、祭禮の當日になると誰も彼も一切の業務を廢し、太陽を祀り海水に浴し、終日歡樂に耽つて居る。で、恒河ヂユムナ兩河の合する處か、若くは恒河の海に注ぐ處などには、老幼男女

の大群が盛んに水を浴びて居る。是れ其罪を清めんためである。

(二) マハーシヴァラトリー、所謂シヴァの大祭日で、日取は二月十二日、此日は日中は一切斷食である。夜になるとシヴァ寺院に集り、翌朝五時頃に解散する。其間僧侶はシヴァ名經を讀むのである。

(三) ホリ 此祭禮は二月の下旬から三月初旬にかけて、十日間行はれる印度有名の大祭で、歐洲に於けるカーニヴァル祭と似たものだそうである。此日となると種々な嘘の手紙を親類緣者に出したり、悪にもつかない事をいひつけて友人の家に使者を出したりする。夫迄はいゝが年若い男女が相抱いて亂舞する是が抑も風敎壞亂の基因で、幾多の奇々怪々事が盛に此祭禮期間に行はれる。殊に最後の一日になると、上流の婦女子は一歩も屋外に出ることができない、若し出やうものなら數日の歡樂に殆んど狂者の如くになつた青年に捉へられ、否應なしに恥められるといふことである。

（四）ラーマ、ナヴアミー、四月新月の日に始まり、九日目に終る、其九日目がラーマの誕生日で、僧侶はラーマの偶像を襁褓の中に包んで參詣人に示すと愚夫愚婦共が頻りに難有つて拜むのである。

（五）ナガ、パンチヤミー　龍を祀る日である、八月新月の日から五日目に相當する、此日は生蛇を捕來り是に牛乳と卵とを與へる。

（六）ナラリ、パウルニマ　日本でも田舍に行くと、二百十日若くは二百廿日と、提燈など點じて其無事を祈るが、此祭禮は一寸是に似たやうなもので、八月廿三日海上不穩の期節が去つたことを祝するので、此日は美しい花やコ、アの果實を採り來つて海に投ずものである。

（七）クリシナ、ヂヤンマシタミー、クリシナの誕生を祝すので、八月滿月の第八日が其當日である。此日になるとクリシナの偶像を拜むのだ。其翌日は一切家畜を有するもの丶大祭日で、其故はクリシナが幼時牧者の間に養はれた因

緣があるからである。西方印度ではカンホバといふ神を以てクリシナと同一視し、夜中クリシナが生れた時刻になると、並居る信者は悉く狐つきかおこり患者のやうになり、跳ね廻るのがあれば騷ぎ立てるのがある、中には身體を顫はせなから、取止めもなきことを口走りだす奴がある。是等は所謂神が乘移つたと稱せられるので、實に妙な爲體の解らない祭禮である。

クリシナといふのは元來人間であつて、傳說によると牧者ナンダの子であるそうだ。併し生來非常に勇猛な男で、ヤーダヴア種族の豪將となつた人である後其功績に依り神となつたといふことである。

（八）ガネシヤ、チヤルツチ、ガネシヤを祭るの日だ、九月十日の當日になると、土民は土を以て鼠を造り、是に馬具を着せてガネシヤの前に置き、親戚朋友相集まつてガネシヤの功績を語り、後數日、咒文の力に依つて土製の鼠より其精神を取去り、之を輿に乘せ海中若くは貯水の中に捨てるのである。

ガネシヤはシヴア神の子で智と學とを兼ね、又一個の軍神で象頭人身である口中に一個の牙を有し、其便々たる腹は象の夫に似て居るとか。このガネシヤが一日鼠に乘つて旅行をした時、誤つて地上に落ちたるを、天上のお月樣が見て餘りの可笑しさに、アハ、アと大聲立てゝ笑つた。怒つたのはガネシヤである。おのれ惡き月の振舞かな、天下の庶民吾生日に月を仰ぎ見るものは悉く呪し殺さんと言つたので、夫からといふもの、ガネシヤの生日には總て天上を仰ぎ見ないといふことである。

（九）ダシヤハラー、シヴアの女神ヅルガの惡鬼を平定した紀念日で十月十六日に當る。此日の供物はまだ生血の滴る肉類で、普通犢を犧牲にする。

（廿四）汽車中の珍事

カルカツタ出發――快僧藤田德明和尙――亂醉せる英兵――一場の口論――下車ろ！下車ろ！――剃立ての頭を光らせて――和尙英兵を取つて

投げろ――平に御用捨――面倒な事が持上つた

八月六日、吾輩は、カルカツタを出發し、鐵路孟買に向つたのであるが、此間少し語るべきことがある。

當時セーロンの聖跡を經てカルカツタに來た一個の快僧が居る。藤田德明は其名で是より佛陀伽耶に向はんとするものであつた。處が德明和尙英語が少しも話せない、否話せないどころか全然解らない。恰度吾輩がカルカツタを出發する前日英語を解せざるの故を以て共に行かんことを求められた。吾輩快諾、翌日大宮清水兩師に送られて、カルカツタ驛から孟買行きの列車に乘つたのである。

車室は無論三等、どういふものか外に乘合がなかつた。德明和尙と吾輩は悠然と腰掛に倚りかゝり、牛糞を以て充たされた印度に關し、盛に談論を戰はせつゝあつた處へ、ドヤ〳〵と泥醉した英兵が三人ばかり入つて來た。是を相圖

に汽車は搖きだす、乘客は終に五人、屹度混雜するだらうと思つた吾輩は、聊か意外の感に打たれ車窓より首を出しつゝ、眺て消え行く停車場を眺めつゝあつた。

今迄何か鼻歌を歌ひつゝあつた一個の英兵が、何事をか德明和尙に向つて言ひ罵る樣子に、フト振返つて見ると、醉眼朦朧として呂列も亂れ勝に

「こゝなグル〳〵坊主奴、貴樣は一體何國の奴だエ。」といふ。德明和尙は英語が解らない悲しさ、寂寞として無念無想の行に耽けつて居る。

「オイ〳〵此坊主は聾だぜ。」と一個が他を顧みて嘲くと

「ドラ〳〵。」と起つて來て、口を德明和尙の耳に寄せ

「ヤイ馬鹿坊主！」と大喝一聲、鼓膜も破れよと怒鳴つたから堪らない、和尙は驚いて振向き屹と無禮漢を睥睨した。併し何と言つたのか解らない。

「ハツハツハツ！」と三人の英兵は手を叩いて笑ふ。

「中村君此奴等何を言つてるんですか。」と和尙も有繋に腹に据えかてね訊くと

「馬鹿坊主だの糞坊主だの言つてるやうですよ。」と言つてきかせると

「ハハアさうですか、隨分失敬なことを申す奴ですな。」溫和忍辱の誡を守つて格別腹を立てた樣子もない、スルト一個の英兵が吾輩を捉へて、

「君此坊主は何國の者だい。」と頗る亂暴な言葉遣ひ。

「此方は日本で有名な佛敎僧だ。」といふと

「日本の佛敎坊主!?」と直ぐ隣りに居た英兵の肩を搖ぶつて

「オイ〳〵日本の佛敎坊主だとよ。」といつてきかせたが、最初德明和尙を罵倒した奴が是を聞くや否や、ツト立上つて和尙の襟首を掴み

「ヤイ糞坊主、貴樣は基督敎徒たる吾々と同乘する權利はない、下車ろ！」と毛もくじやの手を筋張らして引立てながら、

「下車ろ！下車ろ！　下車なければ斯うだ。」と片手は襟首片手は胸倉と、兩手

に滿身の力を罩めてウンと引張つた。途端！　和尚は得意の柔術でパラリ、英兵の手を拂つてトンと胸を突くと、ヨロ〳〵とよろけてドシンと腰掛に尻餅突いた。

「惡奴何をしやがる。」と立上りさま這度は鐵拳を握固めて打つてかゝつた。言ふまでもなく他の二個も是に加勢をした。

快僧德明和尚はと見てあれば、昨日剃りたての青頭を光らしながら笑つて身構へて居る。

此處實に天下の奇觀！

吾輩は和尚危しと見ば直ちに加勢せんものと、洋杖を固く握り締めつゝをもむろに兩軍の形勢を覗つたのである。

三人の英兵は前後左右から和尚に打つてかゝる。醉步蹣跚、形勢頗る危し。

和尚も今は立上つて居る。

「詮方のない奴共だなあ。」と獨言しながら、先づ正面から向つた英兵の、今や將に打下さんとした右手を掴んで、グイと逆捻ぢに捻ぢてドンと突くと、左から迫つた英兵に衝突つて、兩個共バタリもろに仆れ、一個が腰掛でしたゝか頭をたゝきつけると、一個は腰の邊りを打つて泣面をした。

和尚は有繋に慈悲を知つて居る。兩個の仆れたのを見て急に氣毒になつたのか、駈寄つて抱き起さんとしたのを、今一個の英兵がムンヅとばかり後から抱付いた。和尚も是には少し困つたらしかつたが、エイとばかり當身を喰はせると、アッと驚いて手を放し其儘後なりに挫と仆れた。而も三人は以前の元氣を何處に無くしたか、和尚の前に平身低頭して、

「御免下さい、御免下さい。」と拜まぬばかりに詫び入つて居る。和尚英語を解せざるが故に笑つて無言。

「君奴等は免して貰いたいといつてますよ。」と吾輩が見兼て注意すると、

「ハッハッハッ、辟易れたと見えますね。」といひながら三人の手を取つて起し親しく軍服の土を拂つて座に就かしめた。此雅量ある和尚の仕打には、有繋亂暴なる彼等も頓と感心してしまつて、

「多謝々々。」を連呼しつゝ、今更のやうに其慈悲圓滿の顏に見入るのであつた。

そこで吾輩は三人を前に置て、名譽ある英國軍人が其母國の領土に入り來る外國人に對し、斯る亂暴なる擧動に及んだことを目擊したのは、吾輩等の旅行中に於ける最も不祥なる出來事で、君等のためには無論のこと、吾輩等の敬慕する大英國のために深く悲む處であると、改まつて說法してやると、今は醉も さめ果たと見え、

「イヤ實に濟まなかつたです、醉餘の無禮、平に御用捨に預りたい。」と恐入つた一言に、吾輩も何となく可愛相になつてきて、

「何有君等がさう解つてさへくれゝれば此方は博愛平等を主義とせらるゝ善智

識だから、別に何とも思つて居らるゝ筈もなし、又吾輩とても紳士の義務として、嚴に秘密を守つて他言はしまいから、安心して是から大に語らうではないか。」と慰めてやると、

「イヤ僕等も日本人の强いことは前以て聞いて居たが、實際今日酷い目に遇つて、其感が益々深くなつてきた、惟ふに此方は熟練なる柔術家であるだらう。」と大に和尚の勇氣を賞めて居た。和尚に通譯すると、

「馬鹿に神妙になつたですねえ。」と笑つて居る。

「君等は知るまいが、日本の僧侶は必ず柔術に熟達しなければならない規定で大悟徹底した名僧は、一方に於て活殺自在の大武術家である。即ち此方は夫なので、君等が今少し執念深く喰つて掛ると、一時或は殺されたかも知れない。併し佛敎では慈悲を敎えて居るので、夫程酷く凝らさなかつたのであらう。」

「左様か、イヤ實に濟まなかつたです。」と頗る恐入つて居る。スルト他の一個が、

「君も矢張り其名僧か。」と訊くので、

「否吾輩は名僧でも何でもない、無錢世界探檢旅行者で、朝鮮支那暹羅馬來瓜哇スマトラ緬甸を經、是より印度内地に入り、長驅して西海岸の孟買に出でアフガニスタン、ペルヂスタン、彼斯中央亞細亞の山河を越えて土耳古に出で歐洲を一巡し、亞非利加、南北亞米利加、濠洲の諸大陸を股にかけ、今より六年の後に日本に歸る意だ。」と言つてきかせると、

「驚くべき大旅行だ。」と大に驚いて居た。

斯ういふ内にも列車は茫々たる半沙漠的の平野を走り、翌朝四時丱分にラキシュライ驛に着た。此驛で佛陀迦耶行きに乗換へなければならないので、德明和尚を促して下車すると、汽車は間もなく北方に向つて去つた。先づ預けた荷

物を受取らうとすると、那麽荷物は見當らないといふ。見當らない譯はない、現にカルカッタ驛で預けた證據にチェッキがあるではないかと談じかけると、夫では屹度列車が卸忘れて發車したのであらうといふ。卸忘れたのであらうでは困却るから、吾輩等兩個は直ぐ驛長室に押掛けて、此事を話すと、

「夫はお氣毒樣、それでは早速電報を打つて問合せませう。」といふ。

「何分願ひます。若しあつたら佛陀伽耶驛迄廻送して置て貰いたい。」

「宜しい承知しました。電報の都合で何とかしませう。暫らくお待ち下さい。」と直ぐ電報を飛すと、間もなく返電があつた。曰はく、

御照會の荷物はバンキポール驛に廻送し置く、同驛にて受取られたし。

佛陀伽耶驛迄送つてくれるやうに賴んだが、バンキポール驛とは心得ぬと、其理由を驛長に訊すと、

「佛陀迦耶發孟買行の列車が直通線に合する處で、貴方はどうしても其驛まで

御出になるです。」と説明してくれた。夫では、どつちでも同じこと、成程ラキシユライ、佛陀迦耶、バンキポール三驛で三角線路を形造つて居る。ラキシユライ、佛陀迦耶間、佛陀迦耶、バンキポール間は、三角線路の二邊線で、日本なら早速佛跡參拜鐵道といはれる處である。

吾輩は德明和尚と共に佛陀迦耶行の列車に乘換へ、約三十分の後には兩個共該驛に達して居た。

(廿五) 佛陀伽耶の佛跡

和尚立ちながらパンと燒肉をパク付く——無法な馬車屋——坦々たる大道——菩提樹下の休息——森を隔てゝ一大高塔を望む——大聖死して靈跡獨り寂びたり——心なき番人——菩提樹結婚式——ダルマ先生

佛陀迦耶で汽車を捨てゝ、停車場構外に出て見ると、多くの印度人が例の土下座で、食物を並べて賣つて居る。

恰度空腹を感じた處だ、德明和尚先づパンと燒肉を求め、其の半分を頒つて吾輩に勸めた。思へ圓頂黑衣の一行脚と、南船北馬の一孤客とが、片手に塵に塗れたパン、片手に串に挿した汚げなる燒肉を持ち、焦くが如き日光を浴びつつ佇んだ有樣を、あゝ是れ旅行ポンチの絶好なる畫題にあらずや。

「日本や歐洲の停車場で這麼風をしたら、それこそ白痴か狂者と間違へられるですな。」と和尚切りにパンを嚙つて居る。

「眞實ですね、併し是が少しも目立たないから妙ですよ。」と吾輩は肉を嚙つて水を呑んだ。

「要之周圍に同化するんですね。」

「左樣羅馬に入つて羅馬に從つたものですかな。」

「ハッハッハッ。」と互は笑ひながら、此處でウンと腹を拵えて置て、さて折柄通合した佛蹟行きの乘合馬車を呼止めて、片道幾許で行くかと訊くと、御者先

生吾等二人を外國人と見て、法外極る賃錢を貪る。

「馬鹿野郎！那麽高いことをいふなら最う要らない。」と英語で怒鳴りつけると其劒幕の餘り恐ろしさに其儘馬の尻を叩いて駈去つた。恰度十四五歳の少年が前方からやつてきた。

「君彼奴を傭つて荷物を擔がして遣らうではないか。」と德明和尚の言に、夫よからんと直ぐ呼止め、

「伽耶の佛蹟まで此荷物が持つて行けるか。」といふと、

「賃錢が貰へゝなら……。」と大に道理なことをいふ。

「夫は遣るとも、無論相應な金は遣るよ。」とそこで賃金を定め、和尚の荷と吾輩の荷と一纏めにして、さア擔いで行けと渡すのを無造作に受取り、ヒョイと頭の上に載せ、さも輕さうに先頭に立て早や案内顔である。

茲で少し言つて置かなければならないことは、佛陀伽耶の地名である。吾輩

が曩きに佛陀伽耶停車場といつたのは、其土地の本名ではないので、其實停車場所在地はガヤと稱へられて居る。地圖などには無論ガヤとしてあつて、佛陀伽耶とは記入してない。併し三千年の昔釋伽成道に緣あつて以來、初めて佛陀伽耶といひだしたのであらうと思はれる。尤も實際の佛跡はガヤ停車場からかなりの里程があるので、吾輩は德明和尚と共に、今其靈地を訪はんとするのである。

停車場から佛跡までは幅員十間もある大道で、坦々たること砥の如し、道路の兩側には綠の深い樹木が樹ゑられ、晝尙ほ暗き深林や、清冽玉の如き水流を過ぎりて歩一歩と大聖地へ近くのである。

折柄夏の眞盛り、赤道を遠く離れた處であるけれども、有繋に印度は酷暑い用捨なく頭から照りつけられて、宛然熱鐵を背負つて旅行してるやうだ。荷擔ぎの小僧先づチョコ〳〵と走つて、綠蔭風涼しき處へチョコ〳〵と荷物を卸し

腰を下して吾等二人にも休息めといはぬばかり。

「中村君一休みしやうではありませんか。」と德明和尙汗を拭きながら、同じく樹下の人となつたので、吾輩も續いて腰を下し、見るとしもなく頭上に押被さつた樹を見上げると、夫が一本の菩提樹であつたので、

「和尙見玉へ、是は神聖なる菩提樹ですよ、君が佛跡參拜の途上で、計らず菩提樹下に憩つたのは、佛祖の君に道を授くる前徵であるかも知れない。」といふと和尙はフト頭上を見上げて、

「是は々々、成程菩提の聖樹で御座るな、君の仰せの通り靈地參拜の途上で、斯く聖樹の蔭に憩ふといふも、或は大聖世尊の御惠かも知れない、返す返すも難有い奇緣で御座る。」と切りと難有がつて、口に南無阿彌陀佛を唱へる。例の小僧は横にゴロリとなつて鼻歌を歌つて居る。吾輩は此奇妙な對照に心を奪はれて暫らくは樹下に吾あるを忘れたのである。

花形模樣の更紗の腰卷きをした眞黑な美人が五六人、何かペチャクチャ辯りながらやつてきたので、ハット思つて吾に返ると、是は水汲んでの歸途らしい頭には悉く水瓶を乘つけて居る。さうかと思ふと世話女房が頭に水鉢を乘せて野良歸りか農具を擔いだ良人と共に、何事をかさも樂げに行過るのがある。此處何となく詩の味がある。

ものゝ三十分も經つて又候出發した。午後四時頃遙か行手の林中に、一大高塔の日光を横に浴びて、巍然中空に聳えつゝあるのを見た。是れ佛陀伽耶の大聖塔である。

「あれ見玉へ德明和尙、あれこそ正に佛陀伽耶の靈塔ではないか。」

「實にも〳〵。」と小手打ちかざして、和尙暫らくは感嘆の體。

此時和尙の心は恐らく極樂大往生を遂げたも同じであつたらう。

森を拔け驛て高塔の下に至り先づ主僧を訪れ、德明和尙がセーロン島はアヌ

ラドハプラの佛跡地から貰つてきた紹介狀を示すと、喜んで兩個を引見したのみならず、先方から進んで一泊の馳走を申出でられた。

翌日主僧の案内で佛跡を殘らず見物したが、此地が釋迦成道の地と稱へられて居るにも係らず、其所謂佛陀伽耶の高塔なるものでさへ、或意味に於て吾人を失望せしむること頗る甚だしいものがあつた。

塔は煉瓦で建造され表面に石灰が塗抹してある。形は八角で高さ七十五呎、其角々に佛像が安置してあるのはよいが、其裝飾が餘り美しくないので、打見たところ莊嚴の感を催すことが薄い。加之修繕の方法が其當を得なかつたので掬すべき古色は却つて失はれて居る。

以上の不平事はまだ忍ぶべしとするも、茲に佛敎徒の慨嘆措く能はざる一事がある。夫は外でもない、大聖佛陀の靈跡たる佛陀伽耶の高塔が、異端の印度敎徒のなすが儘に放任してあることである。

吾輩は其餘りのことに驚き且つあきれ、塔の番人たる波羅門を捉へて、

「貴樣は波羅門でありながら釋迦の靈跡の番人になつてるのは可怪しいではなかと。」訊ねて見ると、彼は笑ひながら、

「私は印度敎徒でなく立派な佛敎信者でありますけれども、悲哉他人はさう思つてくれません。」とぼけて居たが、此奴吾輩を以て何事をも知らぬものと思つたのか、斯の如く空々しいことを言つてゴマかさんとしたのである。併し一見して彼が印度敎徒であることは、諸種の事情を綜合して判斷することができたので、吾輩は其時德明和尙と共に、末世の衆生の度し難いことを、大聖釋伽のために悲しんだのである。聞く處に依ると佛跡佛陀伽耶は暹羅政府の手に依つて保存されるものであるといふことで、佛敎徒は正に其厚意を感謝しなければならない。暹羅政府が年々巨額の經費を支出し、態々官吏を派遣して是が管理保存の任に當らしむるは、當世稀に見る處の奇特事であるが、悲哉其派遣

官吏の頭腦が恐しく沒趣味であるものだからして、折角金を掛けて修繕したものが、靈跡の難有味を全然破壞し去つてしまうやうになつたのは、實に嘆はしき次第である。

佛陀伽耶には靈樹菩提樹がある。併し是は大聖大覺當時の寶樹ではないので慥かに三代目の樹であるといふことであつた。改植したのは今より數十年前で今ではかなり大きくなつて居る。

德明和尙のセーロン島佛跡談に依ると、同島に於ける佛敎傳來の始原地アヌラドハプラは、セーロン島唯一の靈地で、紀念とすべきものとては寶塔、寺院宮殿の殘址、是れに一二の墳墓があるのみであるが、而も是等は阿育王子渡島傳道以來佛敎盛衰の跡を徵するに足るもので、一として當時の佛敎事情を追回せしめないものはない。殊に阿育王子の妹サンガミツタが、佛陀伽耶から移植ゐた菩提樹は、二千數百年を經て今は鬱然たる大樹となつて、佛敎徒のセーロ

ンを訪ふものをして隨喜の涙を搾らしむるものがあるそうがある。

菩提樹は印度佛敎徒の崇拜措く能はざる處のもので、前記佛陀伽耶及アヌラドハプラの菩提樹の如きは、常に燈明を點じ美花を捧げて厚く祀つてある。斯く佛敎徒が此樹を尊敬するに立至つたのは、佛陀が此樹下に於て大覺成道したからであるが、玆に面白のは彼の波羅門の連中が、同じく此樹を以て神樹として諸種の儀式に必ず其葉を使用することである。で、波羅門がヴキシヌの神を信ずるの故を以て、菩提樹をヴキシヌの神樹とするに不思議はないが、今一段進んで此樹を以てヴキシヌ神夫自身であるといふに至つては、何ともはやお目出度次第で更に滑稽千萬なことは、菩提樹の結婚式といふのを行る。是が又頗る珍であつて、彼等波羅門相互の間に行はるゝ極めて莊嚴複雜なる儀式は、直ちに取つて以て菩提樹結婚式に應用さるゝので、其配たるものはウエプ樹若くはバナ、樹でなければならない。

此珍談は吾輩が佛陀伽耶の菩提樹下に立つて、親しく德明和尚から聞いたものであるが、此話で思出したのは、路傍往々菩提樹とウエプ樹若くはバナヽ樹が相並んで植えられてあつたのを見たことで、即ち是等は結婚した菩提樹であつたのである。

何は兎もあれ、印度に來て佛敎の跡の殆んど尋ぬべき影だもないには、不少一驚を喫してしまつたので、此慘澹たる末世の光景は、有繋に極樂に於ける釋迦樣でも氣が付くまい。あゝ何たる悲しいことであらうか!?

佛陀伽耶高塔の裏手にある寺院内にダルマ先生といふ善智識が居られた。此人は昔つて日本にもやつてきて、印度に於ける佛跡保存の資金を募つたことがあるそうだが、吾輩が北米に居た當時先生やつてきて、諸處の集會で盛に英語演說をしたものである。で、其ダルマ先生が印度今日の佛敎の、斯く迄慘澹たる有樣になり了せたことをば、非常に嘆じて居られたには、有繋の吾輩も轉た

同情の念に堪えなかつた。

まだ茲に一ついつておきたいことがある。それは高塔の背後にある有名な釋迦成道の座禪石で、高さ四尺横六尺巾五尺の石臺である。で、其上には大菩提樹が、傘でもさしかけたやうにおッ被さつて居る。といふまでもなく、佛陀は此聖樹の下で、悟りを開いたのである。

(廿六) 莊麗なる舊都アグラ府

孟買に向ふ——ベナレスの佛跡を訪ふ——ターヅ、マハル——純白大理石の回々敎寺院——餘りの立派さに呆れてしまつた——アグラを見ざれば印度を語るべからず——グワリオル舊城——魂は有頂天外に飛ぶ——昔の回敎徒——現今の回敎徒はダメだ

德明和尚は尙ほ暫らく此處に留る筈である。翌日吾輩は和尚に別を告げ、ガヤ停車場から汽車でバンキポールに出で、例の荷物を受取り、直ちに孟買行き

に乘換へた。カルカツタ孟買間はグレート、インデアン、レールウエー、コンパニーの經營線である。

ベナレス停車場で下車して、郊外五哩の地にある佛跡地を訪ふた。イヤハヤ此處も火事場の燒殘りを見るやうで、赤煉瓦の殘壘が燒土を被つた態は、何とも形容の出來るものでない。尤も諸種の紀念物は英國政府が悉く博物館に集收したとかで、其處では何物も見ることができなかつたが、幸い佛陀伽耶のダルマ大和尚から添書を貰つて居たので、早速ベナレス廢寺の番僧を訪れると、大に喜んで遠來の勞を謝し、先づ拙宅まで御同道を願いたいといふので、其厚意を謝して後から從いて行くと、彼は吾輩を案内して近所の一民家に入つた。借間住居だなと思ふと果してさうだ。導かるゝ儘二階の一室に通ると、此室が其和尚の居室兼應接室で、印度的の裝飾がしてある處などは中々振つたもので、種々珍しいものや面白いものを出して見せては、懇切丁寧、吾輩のために説明

頗る力むるものゝ如くである。

其夜純印度的の饗應を受け、翌日出發、印度の舊都アグラ府に向つたのである。アラハバッド、コンボールの大驛を經て、列車は驀進にアグラ府指して進みつゝあり。此方面の婦人の風俗を見ると、日本なら白髮婆樣で腰の曲つたやうな老婦が、眞紅の腰卷眞紅の上衣を着て旅行して居る。歐米の婦人が年を老るに從つて厚化粧をするのと同じであるやうに思はれた。

汽車が或る停車場へ着くと、首手足耳鼻に黃金の環を嵌め、夫に諸種の寶石を鏤めた、年の若い富豪の婦人らしいのが、隣りの一等室に乘込んだのを見た吾輩も今迄遲羅瓜哇等で、此種の裝身具を見たことが屢々であるので、カルカツタに入つて以來格別珍しいとも可笑しいとも思はなかつたが、未だ其婦人の如くざま〳〵しいのを見たことがない。首環を隣家の洋犬に見、足環は是を監獄に於ける囚人に見る日本人は、花の如き美人でもあることが、色の黑い印

度の別嬪が、斯の如き珍奇妙々の風をしたのを見ては其氣味惡さ其物凄さに、一種の戰慄を禁ずるを得なかつたのである。

翌朝林間に大理石造の大寺院を望んだ。軈て停車場に着くと、驛夫は口々にアグラ〳〵と叫びながら、車室の扉を開いて廻つた。是れ印度の舊都、有名なる回々教大寺院のあるアグラ府である。

停車場を出て其足で直ぐタージ、マハルに行く、城外のジムナ河に望んだ回々教の大寺院である。西暦千六百三十年シャー、ゼハン大王の、其妃アルジユマンド、バヌ后のために建てたところのもので、莊麗實に天下に比なきものである。

寺院の前には大門がある。此門はカシミル產の赤色の石材を以て建造されたもので、是に白色大理石が嵌めてある。門を入ると二筋の通路がある。其兩側に各廿三個の大噴水が、珍らしくも盛に水を散らして居る其奥に大理石を敷き

つめた三千坪ばかりの平地がある。其中央に聳えてるのが大殿堂で、坪數が約千坪其堂上に建てられた半球狀の塔でさへ直徑五十八呎もある。而も何から何まで悉く白色大理石を以て疊み上げてあるから驚かざるを得ない。其塔の下に大理石製の棺があるが、其周圍に繞らした大理石造の屏風は、悉く波形の透し鏞だから、唯最う其結構の素張らしいのに、魂は有頂天外に飛んでしまうやうだ。

堂內大理石の壁には花卉鳥獸が彫つてあるが、而も紅白青綠皆自然の石色で自然の色彩が表はしてある。諸種の寶石玉珠が是に鏤めてあるのは無論のこと其見事さは到底筆舌の能く形容し得べきでない。併し案內者が付纏つて、見物を引張凧にするには大に閉口である。

淺草の觀音堂が十八間四面あるといつて、其莊大に度膽を拔かれる日本の田舍者は、アグラ府のタージ、マハルを見ては差詰め氣絕でもせずばなるまい。

奥の院には無數の僧侶の居室がある。廣さ六疊敷位で周圍上下共悉く大理石で、室内粧飾も中々見事である。國王行幸の際用ゐた便殿などは、到底お話にならない程立派である。

タージ、マハルを去つてグワリオル城を訪ふた。英兵が劍付鐵砲で番をして居る。入つて見てもいゝかと訊くと、市役所から通券を貰つてきたかといふ。那麽なものはないといへば然らば立入ること相成らんといふ。そこで引返して市役所で通券を貰ひ、再びグワリオル城に取つて返し、番兵に通券を見せると宜しいお入りなさい！

城は三百呎ばかりの山上に建てられて居る。南北二哩東西約一哩、是れ又悉く大理石の建築で、壯麗雄大決してタージ、マハルに讓らない。十五世紀の末から十六世紀の初期に渉つて建てられたもので、六個の大宮殿中マン、シン宮と稱するものが最も見るべきもので、普通彩宮と稱せられて居る。宮殿内の壁

に鴨象孔雀などが、各其自然色を現はして彫刻してあるからで、光彩陸離人目ために眩するものがある。

昔時國王が其臣下を引見した拜謁室を見たが、疊一枚敷き程の大理石の各其周圍に黑色の石で緣をとつたのが六百枚、ヅラリ一面に敷詰めてあるには吃驚してしまつた。而も一枚に一人の割合で座を占めるのだと聞いて、アッと開いた口の塞らなかつたこと暫らくであつた。

國王の浴室を見た。壁も天井も床も大理石であること無論、浴槽は二個あるが、二個共大理石を彫りぬいたので、一個が温浴用で一個は冷水浴用である。而も近時歐米に行はるゝ浴槽の如く、冷温共鐵管に依つて水を導くやうにしてある。

宮女三千は強ち阿房宮にのみ限つたことではあるまい。往昔回々教徒が印度に全盛を極めつゝあつた當時は、花の如き美人（色だけは餘り白くなかつたか

も知れない）が同じく宮殿内に脂粉の氣を帶びて、王者の寵を競つて居たかも知れない。現に吾輩の見た宮女用の居室には、過古の榮華のまだほのかに偲ばれるものがあつたのである。

すまじきものは宮仕といふが、深宮の裡王者の枕席を拂つて、一歩たりとも城外の土を踏むことを許されなかつた宮女は、宮殿の展望臺に倚つて、眼下に演ずる舞踏芝居などを見て、僅かに果敢い生活を慰藉しつゝあつたといふことである。其展望臺が高く廣く大理石にて造られたのが、華やかなりし昔を語りたげに殘つて居る。

斯の如く回々教徒の建築は現代印度に於ける花である。古代彼等が印度に侵入するや、佛像及禪那教聖像の鼻を缺き首を斷ち、亂暴狼藉至らぬ隈もなく、全印度を通じて形體の全き佛像は一も殘らなくなつたのである。現時英政府の恐るべき大勢力を以てしても、尚且つ宗教上の事に關しては、秋毫も干渉することすらできないにも係らず、往昔回々教徒が一擧にして古代の印度を破壞し去つたのは、實に吾人の驚嘆すべき奇蹟で、如何に當年の回々教徒が有爲であつたかゞ知れるのである。誠や印度今日の大觀は其大部分の功勞を回々教徒に歸せしめなければならぬ。

オーラングヂブが印度教徒の最も神聖視するカシ河邊、波羅門寺院の聳立する其眞中央に、魏々乎として天を摩するが如き大回教寺院を建て、波羅門寺院を眼下に睥睨しつゝ、底氣味惡き冷笑を其甍にあびせかけたのは、實に彼が一代の痛快事であつたらうと思はれる。宜なり當時の回々教徒には他の宗教の影は少しも映じなかつたのである。

斯の如く最も痛快に印度を威壓した回々教徒の末路は如何？彼等は蠢々乎として寺院の番をするか、或は山野の間に隱れて牛羊の屁を臭ぎつゝあるので、昔日の偉觀は今や絶對に求むることができないのである。併し回々教徒を偲ば

しむる一事は、回寺の番人が其孰れの國人たるを問はず、必ず跣足にあらざれば堂に上ることを許さない一種の氣慨で、佛教徒が其寺院を奪はれ、神聖なる佛像すら、異教徒の翻弄に任じつゝあるに比べては、今の回々教徒の方が遙かに勝つて居ると言はなければならない。

アグラを出發しデリに行かんとしたけれども、廻路になるので遺憾を忍んでジャシイに出でカルカッタ孟買の本線に合した。此方面は印度鐵道線路の内で、有名なる難工事の場所である。列車は險惡なる大山脈の間を縫ふて迂餘曲折して進むかと思へば、數へきれぬ大隧道を通過し、螺螺の殼を尻から廻るやうなきわどい處も通る。就中最も膽を寒からしめたのは、或一個の隧道を通過した時である。其儘行進を續けんか下は直下千丈の深溪、急湍激して雪と散る奇岩怪石は、牙を鳴らして今や遲しと列車の墜落を待構へて居る。此時に於ける機關師の苦心思ふべし。何も知らぬ吾等さへ胸を躍らしながら如何にして

此難關を通過するかと見てあれば、是は又意外、列車は奔馬の如く隧道を突出して間もなく、危險極る斷崖を臨んでピタと停止した。と思ふと直ちに逆行して他の線路を進むこと數分、最後の機關車が此線路をかわつて、更に第三の新線路に入るや、氣壓を高めた汽罐から眞白な蒸汽が迸ると見ると、けたゝましい一聲の汽笛と共に、列車は第三の線路を韋駄天の如く駈下り、更に山腹を一重と二重と廻りながら、軈て麓の平野に達するのである。

斯くしてカンドワ、プザールの諸大驛を經て、夜の九時頃孟買停車場に着した。

（廿七）印度南部の旅行

牛鍋を圍んで快談——林領事の赴任——孟買出發——呑氣な馬車屋——親切な醫者——小津君の同情——日本式養蠶法——人糞肥料苦心談——

夜ではあつたが英語の解る土地だから格別の不便も感せず、十時頃には早や

村田雜貨店に旅裝を解いて居た。此處へ來たのは香港の瀧藤君の紹介に依つてである。當時主人の村田君は歸朝不在であつたにも係らず、留守の青木支配人が萬事を引受けて非常に優待された。其夜青木君と共に牛鍋を圍んで快談夜を徹したのは萬里の孤客に取つてまことに會心の事であつた。

翌日領事館を訪問すると、折柄領事は歸朝を命ぜられて、桐野書記生が領事代理をして居られたが、吾輩の訪問に對し種々懇篤なる便宜を與へられた。午後は上海の同文書院の根津君から紹介された、五十嵐君を正金銀行支店に訪れた。恰度其時松尾支店長も出勤して居られたので、五十嵐君の紹介で會談するの榮を得た。松尾君は現今の正金銀行の東京支店長である。

其翌日新任領事林君が三井物產會社の廣島丸で着任したので、在留者の重立つた人々と共に埠頭に出迎えた。此時松尾正金支店長の紹介で、三井物產の馬島支店長、郵船會社の伊吹山支店長其他の諸名士に知らるゝことを得た。無錢

旅行者は行く先々で、一人でも多く知己を作るといふことが、何よりの必要事であるので、旅行前程の便宜は實に是等の同情に依つて得らるゝのである。

翌日松尾君を海岸山の手の社宅に訪問した。折柄の日曜、社員の重立つた面面、大抵は此處に集まつて居たので、計らずも談話に花が咲いて、夕方まで据り込んでしまつた。恰度此日は五十嵐君が別莊地納涼地として知れたるプーナ地方に旅行して、社宅に居合せなかつたのは殘念であると思つてると、午後二時頃同君は馬車を驅つて社宅にやつてきた。どうしたのだと訊くと、今日は一日遊んでくる意であつたが、急に雨に降られたので、折角の感興をメチャ〳〵にされ、這々の體で歸つて來たのだといふ。それから一段と座が賑かになり、室內電氣がパッと點くのをきつかけにアラビヤ海を吹拂ふ涼風徐ろに到り、折柄來合せた夫人連の奏する洋々たるピアノ、ヴァイオリンの音に連れて、華やかに飾られた食堂に導かれると、其處には丁重なる洋食及日本食の御馳走が

あつて、久しく屏息したる胃腑の蟲を驚かした。

翌日タタ商會の紹介で南部印度に於ける同商會の養蠶場を見るべく、孟買停車場から汽車でマイソーア地方に行つた。チャナバタナ驛で汽車を捨て、土地の有力家マスタン氏の養蠶製絲の事業を視察した、處が第一に驚かされたのは、桑樹培養法の不完全なことで、桑園一面、些しの間隔もなく桑苗を植付けてある。從つて桑樹の發達が十分でない、と同時に又葉質が非常に惡い。マスタン氏に會つて話して見ると、どうも養蠶の結果が面白くないそうだ。そこで吾輩は多少此事には經驗があるので、日本流の養蠶經營に就て講釋して聞かせると、同氏も大に發見する處があつたといつて喜んで居られた。

前に言つた通り視察の目的は、クロースヘットに於けるタタ商會の養蠶業にあるので、チャナバタナは其位にして引上げ、馬車を備つてクロースペットに向つた。此時吾輩は養蠶場主任の日本人小津氏に宛てた紹介狀を持つて居たの

で、馬車屋にそれを見せ、唯一途に手紙の宛名の處へ連れて行けと、言語が通じないので手眞似で命ずると、馬車屋の奴は委細承知したといふ顏付で、其儘馬に一鞭加ふると共に、ゴロ〳〵と馬車は搖ぎだした。先づ是で一安心、其内に目的地に着くだらうと、四邊の風物を飽かず眺めながら、行けども行けども養蠶場らしい處が見えぬ。ハテ面妖なとは思つたが、印度字で書いた手紙の表書まで見て、分別顏してうなづいた四十男の馬車屋、まさかに目的もなく引張廻す譯もあるまいなどと、半分氣遣つたやうな、半分安心したやうな、何だか不得要領でものゝ半日も乘廻したが、更にそれらしい處に行かない。此に於て吾輩も漸く變に思つて來た。此奴吾輩を赤毛布と間違へ、目的もなく引張廻した上に、賃錢だけは强請る意であるかも知れない、さりとは不屆千萬な奴、ヨシ夫ならば此方にも其覺悟があると大喝一聲、馬車屋の度膽を拔いて置て、徐ろに馬車を停めしめ、手眞似身振りで一體どうしたのだと詰ると、心配するな

今に連れて行くといつたやうな顏色で、さらでだに底光りのする兩眼を輝かしつゝ、吾輩を見上げて沈默つて居る。其面構の滑稽さ加減を見ては、有繋にフツと吹出さずには居られなかつたが、考へて見ると心細くもなつたので、ヒラリ馬車から飛下りて、物をも言はずスタ〳〵と歩きだした。驚いたのは馬車屋同じく御者臺から飛下り、吾輩に追縋るやうにして、言葉は解らないが賃錢をくれといふやうである。

「馬鹿な！人を散々田舍道へ引張りこんで、何處へどう行つていゝか解らないやうにして置きながら、それで賃錢を呉れろが聞いて呆れる。」と握太の洋杖で振放つてスタ〳〵と歩きだすと、又も追掛けて來て、譯も解らぬことを辯じ立てる。餘り蒼蠅くてやりきれないので、大喝一聲、馬鹿野郎と怒鳴ると、其勢に辟易して何かグヅ〳〵言ひながら、馬車に打乘つて驅て其姿を森の彼方に隱した。

吾輩も愈々是で單獨坊主となつたので、路々字の讀めそうな奴に遭遇すると、例の印度文字の紹介狀を出して見せたが、見せた奴も見せた奴も、一人として讀めない、偶に解つたやうな顏をして敎へる奴があるから其方へ行けば、飛でもない間違つた處へ行つてしまう。是には吾輩もホト〳〵困却つてしまつた。大きい圖體をした印度巡査が來る。彼奴なら英語が解せるだらうと思つて、話しかけて見ても徒勞だ。終には詮方盡きて、行き當りばつたりと覺悟を定め、足に任せて行く內に、落日を浴びてあかね色に染まつた森の彼方に、二階建の洋風の家があるのを見付けた。彼處に行つて訊いて見たら知れるだらうと、急に元氣付き、驅て其家を訪れて見ると、計らずもそれが英人の醫者であつたので、早速養蜂場の所在地を訊ねると、それならば此處から最早譯もないこと、暫し待ち玉へ、馬車を用意して吾同道の主人とならんほどにと、思ひがけなく親切に言つてくれるので、地獄で佛に會つたやうな氣がして其厚意に甘へ、靜

かに暮れんとする田舍道をクロースペットへと急いだ。

日の全く暮れない前に目指す養蠶場に着き、小津君に面會を求めると、容貌淡麗なる一日本人が出て來た。是ぞタタ商會に其人ありと知られたる小津君其人で、吾輩の遠來を手を取らんばかりに喜ばれ、且つ吾輩の爲めに醫者の親切を謝してくれた。

醫者は遲くなるからといつて、直ぐ馬車を驅つて歸つてしまう。吾輩は先づ應接室に通つて、初對面の挨拶を濟すと、快活なる小津君は、

「實は孟買から來狀があつたものですから、今朝程停車場へ馬車をお迎に出しましたが、それらしいお方を見ないといつて、空しく歸つて來ました。イヤどうも呆然してますからねえ。」といつて笑はれた。

小津君は純然たる日本人ではないので、神戸で生れた雜血兒である。タタ商會神戸支店から撰拔されて孟買本店詰となり、更にクロースペットの養蠶場の

主任になつた前途有望の青年である。此處には小津君の外、日本人で渡邊といふ技師が、其獨特の敏腕を振つて居る。

翌日養蠶業の現狀を視察した。一體マイソーア地方は養蠶に適し、繭の收穫も一年四回あるが、一般に舊式で蠶カラなること夥しい。前にも言つた通り桑樹の培養法が宜しきを得ないから、桑葉の性質が極めて劣等だ。從つて繭の性質が能くない、就中蠶蟲のあがり前には、悉く是を天日に晒して、一日も早く蠶を造らせる工風をするなどは寧ろ亂暴だ。更に製絲法を見ると、其一層印度式なのに驚く。無論座繰式であるが、大形の釜の中に繭を澤山入れて、終日間斷なく繰つて居る。甚だしきは大の男が兩手で持て廻して居ると云ふ有樣であるから從つて湯が濁つて繭が汚れる、出來上つた生絲は純白でなくして、著しく黃色を帶びてくる。そうして出來上つた絹糸は調度麻かと思われる程である。

クロースペット地方一般の養蠶製糸法は右の通りであるが、小津渡邊兩君の

監督の下にあるタタ商會のそれは、純然たる日本式で、其成績の如きも大に見るべきものがある。小津君は桑樹培養の苦心を語つて曰はく、

「桑園の肥料は全然人糞を用ゐることにしましたがね、是には最初僕も閉口しましたよ、何しろ一通りならない道理の解せぬ土人を使役しての仕事でせう一時は困りましたねえ、奴等は牛の糞を喰ふ癖に、人糞肥料と聞いて、膽をつぶしたから面白いぢやありませんか、臭い者身知らずですね、最初の内はどんなに嚴ましくいつても、肥桶に近寄らうともしなかつたのですがね、僕等が先達てやつて見せると、有繋に袖手傍觀もできないといつたやうな譯で澁々ながら肥柄杓を持つやうになつたです。でも此頃ではすつかり慣れて、一生懸命にやつてますよ。ハッハッハッ、妙なものぢやありませんか、習はうより慣れろですね。」と成程日本一流の人糞肥料には、有繋の印度人も驚いたに相違あるまい。夫にしても純日本人でない小津君が、自ら人糞を滿した肥

桶を擔いで、桑園の間を横行した勇氣には感心せざるを得なかつた。

(廿八) 汽車轉覆の大慘事

堪え難き足痛——牛車旅行——呆氣に取られた巡査——知事官邸——親切なるスパーク君——自轉車で汽車と競走——汽車轉覆——目もあてられぬ慘狀——大手術場の如くだ

翌日小津君の案内で他方面の視察に向つた。道の一里も歩んだ頃、どうした譯か左の足が孟買竹のやうに腫れ上つて、痛くて堪らないのみか、果は終に歩けなくなつた。小津君は切りに憂慮する、吾輩も何だか餘り無頓着でない。靴でも脱いだら少しは楽になるかも知れないといふので、其通りにすると恰度一輛の牛車が通りかゝつた。土語に巧みな小津君が理由を話して、ベンガローアまで此病人を乘せて行つてはくれまいかと話すと、

「それはハア困るだんべえ、何有譯は無いこんだ、乘つせい、連れてあげるだ

に……。」と親切に承諾してくれたので、小津君と其牛男に助けられて牛車に乗つた。牛に曳かれて善光寺詣でといふが、南方印度で牛車に乗せられるなどは有繋に思ひ及ばないことであつた。

直ぐ曳出すかと思つて見てると、件の牛男は先づ懇ろに牛の前額を撫で、更に其手を以て己れの額を撫で、宛然人に物言ふごとく、

「お前御苦勞だがのう、此方が足痛を惱んで居なさるのだで、ベンガローアまで乘せて行くだあよ。」と牛を慰めて置て、

「氣を付けさつせいよ、ソク〳〵動くだに。」と何とも變挺な歌を唸りながら、ガラ〳〵と牛車を曳きだした。

聽てベンガローア知事官邸の前に着いた。奇妙な來客があつたのに驚いたのは、官邸門番の赤帽の印度巡査だ。眞黑な顏の中から兩眼を異樣に輝かして居た。小津君が牛男に厚く禮を述べる、吾輩も牛車から下り、小津君から敎はつ

た印度語で、丁寧に其勞を謝すと牛男はガラ〳〵と牛車を曳いて門外に立ち去つた。

呆氣に取られて見て居る巡査に刺を通じて、知事に面會を求めると、只今は不在だが最う間もなく歸宅る筈だから、兎に角應接所で待たれたらよからうといふので、兩個は案内に連れ美々しく飾られたる應接室に通つて、知事の歸邸を待つことゝした。日本の知事なら先づお歸りいの掛聲で、こけ共の度膽を拔くところだが、此地の知事は頗る氣樂だ、ものゝ三十分も待つたと思ふ頃、自轉車で歸つて來て巡査から聞いたのか、スタ〳〵と應接室に入つて來た。此處初對面の挨拶宜しくあつて、談話は直ぐ養蠶の事に飛んだ。

知事名はスパーク、日本養蠶業の盛大なることを知つて御坐る。

此地方の養蠶もどうかして貴國のやうにしたいと思つて、當時大に奬勵してはゐますが、人民が愚昧で徒らに舊風を墨守して、更に頑として動かないの

で困却る。」とこぼして居た。其内に正午になる。何はなくとも、御両方共どうぞ此方へと導かれたのが食堂で、スパーク夫人の特に手腕を見せられたといふ印度料理の馳走に預つた。食後相變らず養蠶の談で小津君が、

「印度の婦人は誠に柔和で結構であるが、工女として使役するには遺憾の點が多い。」といふのを知事は直ちに、

「それは又どうした譯でせう。」と反問する。

「つまり早婚の弊習が其主なる原因で、折角役に立つやうになると、恰度結婚の年頃になる、結婚する、最う工場には來ないといふやうな次第で、吾等の工場などでも、工女の新陳代謝が頻繁なために、始終技倆の未熟なものばかりを使用しなければならないので、實は大に閉口して居るのです。」といふと知事も成程といつたやうに、無言の儘大きくうなづいて、

「成程さうでせうなあ、併しそういふ缺點は漸次改良されるだらうと思ふ、又

吾輩も職責上夫等の改良方法に就ては、何分の手段を取る意で居るですから起業家はドシ〳〵養蠶製糸共、盛にやつて貰いたい。」といつた。

知事が吾輩の壯擧にあらゆる賛辭を惜しまなかつたのは無論であるが、フト吾輩の足を見て非常に驚き、

「一體夫はどうされたのか。」と訊くから、實は斯樣々々と容體を述べると、

「夫は定めし御苦痛でせう。」と自ら藥品を持來り、親切にも患部に塗り、はては繃帶までもしてくれたには頓に感謝の辭も出ない程で、

「貴人の前をも憚らず、斯樣の見苦しき風をして居たのは恐縮で、實は寛大なお見逃しに預りたいと思つてる處へ、是は又御親切な御配慮に預り、何ともつて、

感謝の辭さへ出ないです。」と厚く禮を述べると、スパーク知事は快活に笑

「ハツハツハツ、何有其麼御心配は御無用。」と更に氣にも掛けないばかりか、

尙何角と注意をしてくれたには、有繋に英國人は違つたもの。日本の所謂知事公なるものゝ中で、無錢風來の旅行者の足に、自ら繃帶を卷く雅量のある連中が何人あるだらう!?

其日はスパーク君の切なる勸めに從ひ、官邸に一泊するの光榮を有した。談話は夜の八時頃まで續けたが、知事は明早朝地方巡視の途に上るの故を以て、「明日は早いので自然お目にかゝることができなからうと思ふ。どうか兩君共御機嫌能く、其内にも中村君は、氣を付けて首尾能く、大目的を達せられんことを希望します。」と丁重に挨拶されて其儘寢室に引下つた。吾輩共も特に用意された寢室に通り、旅裝を解いて寢臺に横はると、身は今南部印度にあるとも白河夜船、翌日起きて見ると知事は既に出發された後であつた。

翌日官邸を出發、幸にも脚部の水腫も治癒したので、小津君の說明で方々を見て廻り、其晚は小津君の宅に一泊、翌早朝小津君と馬車を共にして停車場

に駈付けた。此時小津君は一輛の自轉車を馬車に積んで居た。

「其自轉車はどうするのですか。」と訊くと、

「是ですか、是は君が汽車へ乘つて、停車場を出發するとき、僕は是に乘つて汽車と競走しつゝ、君の行を送るのです。」といふ。面白い男だと思つてる内に停車場に着く。ヒラリ飛下りると、恰度今孟買行の列車が出るといふ處だ。急いで切符を買求め、小津君に訣別して一番最後の列車に乘ると、汽笛一聲、地響きさして汽車は搖ぎだした。と見ると快活なる小津君は、輕輪を踏んで手巾を打振り、今や韋駄天の如く停車場を走り拔けんとする列車と、一生懸命で競走して居る。何處までも面白い男だ、何處までも可愛い男だ、汽車と競走するなどは、何處までも小津式を發揮して痛快だ。併し疲れること知らぬ汽車と競走しては、有繋の快男子も其敵でない、見る々々内に後れて曬て其姿も見えなくなつた。

此鐵道はサウスランマハラタ會社の線路で、グンタカールを經て孟買に達するのである。

小津君と訣れて三十分、列車に小さな驛を二つ三つ飛ばして、速力は今し絶頂に達して居た。此時計らずも一大珍事出來して、吾輩は九死に一生を得たのである。

事件の起因はかうなのだ。列車が次の驛に飛込む約四五丁前、どうしたはづみか前から三番目の列車と四番目の列車が外れてしまつた。急に速力が增して變だと氣が付いた機關師が、窓からヒョッと首を出して見ると此體だ。驚いて機械の運轉を中止し、制働機を締めてグッと機關車を停めたところへ、後部數輛の列車が恐しい惰力を以て突進し來り、停止せる前部の列車に衝突したから堪らない、機關車は制働機を締めてる、後からは衝かれるといふ譯で、中に挾まれた前部の列車が二輛、奔馬の如き後部列車の先頭に掬はれたと見る間に、

乘客を乘せた儘、パッタリと線路の眞中に投出され、横さまに轉覆して目もあてられぬ慘狀！

吾輩は最後の一室に居た。乘合客は埃及の煙草商人、是から孟買に歸るのだといふ男が一個で、衝突の際此奴が車窓にしたゝか頭をぶつ付けて、大きな瘤を出來しただけ、吾輩の如きも前額部を輕く打つた位で、別に痛いとも思はなかつた。そこへ車掌が大變々々と連呼してやつてきて、扉を開いて早々に、

「皆樣早く下車て下さい、大變です、列車が轉覆しました。」といふ。

「オイ〳〵、君少しも周章てるには及ばん、衝突は最う濟んだのだ、此上吾輩の列車が轉覆する恐はない、早く負傷者の世話でもし玉へ。」といつてやると成程夫もさうかと氣付いたものか、物をも言はずに駈去つた。で、吾輩は悠々と荷物を提げ、扉を排して外に出て見ると、澤山の重輕傷者が紅血に染まつて線路に投出され、互に悲鳴を上げて助けを呼んで居る。誰も彼も此慘澹たる光

景に目を奪はれ、自分の無事であつたことなどは頓と忘れて居る。車掌や機關手が屍體や重傷者を抱えて、右往左往に入亂れて居る　粉塵に碎かれた列車は淋漓たる鮮血を被り、其隙間々々から無殘にも切斷されたる手足が幾本となくニユッと現はれて居る。迚も二目と見られた光景でないので、荷物を擔いで程遠からぬ次の停車場へと急いだ。

軈て此處へ屍體が運ばれる。重傷者が車掌に抱えられてくる。血に塗れた輕傷者が單獨でやつてくる。其内に醫者が二三人馬車で駈付けてくる。直ぐ治療に取掛る。停車場は上を下への大騒動！

強烈なるヨードホルムの臭に交つて、悲哀の嘶きと號泣の聲が停車場から漏れる。宛然大手術場の如くだ。

（廿九）野蠻極る拜火教の葬式

生きた案山子――滑稽な便所の表示法――パルシーの話――慈善動物病院――絹織物會社――拜火教の葬式――花園の如き墓地――恐ろしき人食鳥――屍體を啄む――鬼哭愁々――

孟買行の臨時列車が來たのは、それから八時間の後であつた。此大珍事に遭遇し、旅行の幸先を氣遣つたのか其停車場から馬車を傭つて、ベンガローア地方へ引返す紳士連もあつた。併し吾輩は其臨時列車に乘つて、慘澹たる光景を見返り見返り孟買へと志した。田圃の中を眞一文字に走る汽車の中から見ると畑に群り下る小鳥を追はんとてか、彼處にも此處にも土人が高臺の上に鳴子を持つて佇立んで居る。頗る呑氣なものだ。最初は案山子かと思つたがさうでない、時々思出したやうに、頓狂な聲を張上げ、鳴子をブン〳〵鳴らして鳥を追ふて居る。あれでは案山子と相距る僅かに一歩だ。ライスカレーを三本指で食ふ時代は、それでいゝとして、今にナイフやフォークを持たなければならないやうになつたら、さうも行くまい、今の内に出來るだけ、悠々閑々と構へて置

くべきである。

軈て汽車はグンタカール驛に着く、此驛でマドラス線即ちグレート、インデアン、ペニニシユラ會社の線が、サウスアン、マハラタ會社の孟買線に合するのである。此處でマドラスから來る列車を待合せるために、六時間停車するといふので、荷物を擔いでツカ〳〵と休憩室へ入つて行つた。

印度の停車場は實に厄介で、例の種族の別が複雜なために、其用ゆる文字が異つて居る。從つて停車場の名が一通りでは濟まぬ、大抵四種類の文字で掲示してある。無論其内には羅馬字もあるけれども、それにしたところが厄介千萬で、更に滑稽なるは便所だ、文字で便所であることを書表はし、其上に男子用婦人用を區別するのは、非常に手數であるものだから、會社も一々其煩に堪ゆること能はず、終に案出した一便法がある。即ち繪畫を以て男女の兩便所を表示することである。成程是ならば眼に一丁字なきものでも、容易に便所を探出す

ことが出來るのみならず、男子用婦人用を取間違へるやうなヘマをするに及ばない。それにしても此繪畫表示法は痛快である。

其内にマドラスから孟買行の列車がきたので、夫に飛乘つてグンタカールを出發した。汽車の北上するに從ひ、茫漠たる沃野が漸次眼前に展開し來り、吾人をして其大陸的なるに喫驚せしむるものがある。

此邊の鐵道線路の兩側には、萬年青のやうな植物が植付けてある。此植物は極めて猛烈に根を張るので、線路の地盤は是がために年一年としまつて、降雨や出水のために崩壞するやうなことはない。加之此植物の纖緯で船舶用の索條を製造することができるといふことで、マニラロープに比し左程の遜色はないそうだ。實に此植物は一舉兩得の有要植物で、年々の產額も隨分あるといふことである。

此處一帶平野であるために、鐵道枕木にするやうな材木がない。そこで止む

を得ず一種の鐵材を使用して居る。鐵の枕木といふのも變なものだが、專門家に訊して見ると、其結果は非常に良好だといふことである。

孟買に歸ると正金の松尾支店長から來狀があつた。明日日本人會を兼ね林新任領事の歡迎會を開くから、例の幻燈器械を以て來會せられんことを望むといふ文句であつたので、翌日定めの時間に、松尾君の社宅を訪問すると、軈て孟買在留日本人のお歴々が集つてくる。郵船の伊吹山君、三井の馬島君などは見知越しだ。林領事も赴任の當時出迎へたから知つて居る。其外に珍客が二個程ある、それは外でない當時印度旅行中であつた安正禍島將軍と、歐洲漫遊の途次立寄つた吐霓森山法學士とであつた。

食堂が開かれると、三鞭とか萬歲とかいふこともあつた。宴果て、吾輩の餘興の幻燈に移つたが、考へて見れば妙なもので、前世紀的の古器械で當代名流の眼を喜ばせようといふのだから、技師たる吾輩も中々苦心が要る。併し這麼

さて動物病院を見やう。門を入ると宏壯なる煉瓦建築の病室が五棟ある。其内の三棟は病牛を收容するのだ。牛一頭につき間口一間半奥行二間の室が供給されるといへば、中々贅澤なものである。一棟が馬の病室だ、他の一棟が犬の病室だ、犬の爲めには特に寢臺まで備付けてある。毎日獸醫が回診してる、イヤハヤ念の入つた譯のものである。

病院を見てシユラク氏の邸に歸り、夫人令孃にも紹介され、洋々たるピヤノ彈奏の間に、丁重なる晩餐の馳走に預り村田雜貨店に歸つた。

翌日タタ商會主のタタ氏の案内で、サースン絹織物會社を見た。此時恰度小津君が南印の養蠶場から來合せて居たので、同君も同道で工場を見學するの便宜を有した。

工場は三棟ある、織物工場、紡績工場、繰返工場で、規模は中々大きい、併し製品は粗雜で安價を旨として居るから、到底日本人の目で見て感心のでき

を得ず一種の鐵材を使用して居る。鐵の枕木といふのも變なものだが、專門家に訊して見ると、其結果は非常に良好だといふことである。

孟買に歸ると正金の松尾支店長から來狀があつた。明日日本人會を兼ね林新任領事の歡迎會を開くから、例の幻燈器械を以て來會せられんことを望むといふ文句であつたので、翌日定めの時間に、松尾君の社宅を訪問すると、軈て孟買在留日本人のお歴々が集つてくる。郵船の伊吹山君、三井の馬島君などは見知越しだ。林領事も赴任の當時出迎へたから知つて居る。其外に珍客が二個程ある、それは外でない當時印度旅行中であつた安正禍島將軍と、歐洲漫遊の途次立寄つた吐霓森山法學士とであつた。

食堂が開かれると、三鞭とか萬歲とかいふこともあつた。宴果てゝ吾輩の餘興の幻燈に移つたが、考へて見れば妙なもので、前世紀的の古器械で當代名流の眼を喜ばせようといふのだから、技師たる吾輩も中々苦心が要る。併し這麼

欠

MISSING

さて動物病院を見やう。門を入ると宏壯なる煉瓦建築の病室が五棟ある。其内の三棟は病牛を收容するのだ。牛一頭につき間口一間半奥行二間の室が供給されるといへば、中々贅澤なものである。一棟が馬の病室だ、他の一棟が犬の病室だ、犬の爲めには特に寢臺まで備付けてある。毎日獸醫が回診してる、イヤハヤ念の入つた譯のものである。

病院を見てシユラク氏の邸に歸り、夫人令孃にも紹介され、洋々たるピヤノ彈奏の間に、丁重なる晩餐の馳走に預り村田雜貨店に歸つた。

翌日タタ商會主のタタ氏の案内で、サースン絹織物會社を見た。此時恰度小津君が南印の養蠶場から來合せて居たので、同君も同道で工場を見學するの便宜を有した。

工場は三棟ある、織物工場、紡績工場、繰返工場で、規模は中々大きい、併し製品は粗雜で安價を旨として居るから、到底日本人の目で見て感心のでき

るものでない。尤も是で緬甸印度の市場で、日本品と競爭してかなりの利益を占めてるから妙だ。

職工の數は千二百人、一人一日の織高は十二ヤールで、給料一ヶ月十五ルピー即ち邦貨九圓八十五錢だ。

此絹織物會社に就て一寸面白い話がある。といふのは外でない、松尾君の社宅で三井の馬島君に會つたとき、吾輩孟買に此種の會社があるかどうかと訊ねたことがあるが、其時馬島君は、

「僕は此孟買に八年居る、從つて孟買事情に關しては自ら信ずる處があるつもりだが、まだ此地に絹織物會社があるといふことを聞かぬ。」と力んで居たが前記タタ氏の案内で見ると、あるも〳〵大きは會社が二個もあつた。萬事が這麼風だから驚かざるを得ない。

バルシイの葬式は野蠻極まる拜火教の儀式で行はれるのである。孟買に來て

は是非共是を見なければ、印度の土産話は未だ充分とはいへない。併し葬式はあるかないか解らない、如何に面白いものでも、便々と人の死ぬる日を待つて居る譯に行かないので、評判の墓地だけでも見て置かうと、バルシイの一知人の案内で出掛けた。拜火教徒の墓地は孟買郊外絶勝の地を卜してある。先づ是に驚いて門番の處に行く、門番先生直ちに電話を以て、山上の墓地監理人に此旨を通ずる、スタ〳〵石段を上ると案内者が待受けて居る。此男の後について尚も石段を上ると、山上の廣場が即ち墓地である。と見ると爛漫たる百花に彩られ、宛然是れ一個の大花園の如き觀がある。肅殺の氣滿ちて閑古鳥でも鳴きさうなのが普通の墓地の有樣だが、是は又其華やかさに見る人をして一驚を喫せしむるものがある。

境内諸處に方形若くは圓形の煉瓦の圍壁がある。是ぞ話に聞いたことのある死體を人食鳥に喰はせる處なので、一種の感に打たれて見て居ると、恰度其處

へ一組の葬式がやつて來た。是は千歳の一遇、好い處へ遭遇した、印度の土産袋も是さへ見れば最ういつぱいだと、傍に近づいて見ると、圍壁の鐵扉は靜かに開かれ、死體を納めた棺桶は中央石臺上に据えられた。何處よりか來りけん此時數千百羽の人食鳥は圍壁の上に群り下り、羽音騷がしく恐しき嘴鳴らしつつ、棺の開かるゝを今や遲しと待構へて居る。其内に棺桶が破壞される、死體が現はれる、途端！形相恐しき人食鳥は、さつと飛下つて死體の上に集まるよと見る間に、靈なき肉は啄み盡され、臟腑や骨を爭ふ人食鳥の叫聲は、美しき花園を修羅の大地獄と化せしめた。あゝ是でも此世の出來事であらうか!?

落日を浴びて墓地を飾つた花園は華やかに夕映して居るが、血痕に彩られた圍壁の内は、慘澹たる白骨冷やかに眠つて、鬼哭愁々の觀がある。吾輩は此時思はず戰慄したのである。食ひ足りないのか尙ほ踏止まつた數千の人食鳥は曇りかゝつた空を仰いで、口々に生者必滅を叫んで居る。あゝ殘酷極る葬式な

るかな。

（三十）愈々蠻境探檢の途に上る

福島將軍の激勵——外務省の令達——森山法學士驚いて旅程を變更す——豪傑中村春吉君——有繋の豪傑も驚いた——危險なる彼斯旅行——生死豫め期すべからず

吾輩は是で大抵孟買の視察も了へたので、ソロ〳〵出發と覺悟を定め、吾輩と相前後して北部印度を旅行せられんとする福島將軍を三井物產會社の社宅に訪問した。將軍は快く面會されたので、彼斯旅行に就き高敎を仰きたき旨を語ると、將軍は、

「さうですなあ兎角の世評はあるやうだが、唯一の武器は健全なる意志と正當なる行動だ、是を措て他に安全な旅行法はない。」と熱心に吾輩の彼斯旅行を奬勵された。

當時森山法學士も吾輩と同じくベルヂスタンから彼斯中央亞細亞を經て歐羅巴に入りこむ筈であつたが、其時孟買領事館に到達した外務省の令達に、中央亞細亞を旅行せんとするものは、豫め露國陸軍大臣の認可證を携ふべしといふ文句があるに驚いて、是は堪らぬと急に模樣をかへ、吾輩の孟買を出發する前日汽船に乘つて渡歐の途に上つた。

彼斯中央亞細亞を經て歐羅巴に出るのは、實に危險極る冒險旅行として、外國人では何人も敢てするものはない位であつた。現に自轉車旅行家として、一時滿天下の人を驚かした豪傑中村春吉君さへ、孟買で吾輩を待つこと四ケ月、前程を共にせんことを望んで居つたにも係はらず、吾輩の彼斯を通過せんとするを聞き、斯る死地に入るの愚は學べないと、是又遂に森山君の轍を踏み汽船で渡歐した程であるから、如何に暗黑界として彼斯が、旅行者をして恐を抱かしめたかゞ解るではないか。併し吾輩は深く信ずる處があつたので、斷然

死を賭して此蠻境を探檢せんとしたゝめ、森山君の孟買出發に後るゝこと一日となつた。

罐詰の肉や藥品など其の他總ての準備を整へ、旅裝も甲斐々々しく、在留邦人に送られて、生死豫め期すべからざる冒險旅行の途に上つたのである。而して當時の慘澹たる出來事は是れを次編に於て精しく讀者諸君に語る意である。

南洋印度奇觀 終

明治四十一年十二月廿九日印刷
明治四十二年一月廿日發行

南洋印度奇觀奥付

定價金四拾五錢

編輯者　中村直吉
編輯者　押川春浪
發行者　東京市日本橋區本町三丁目八番地　大橋新太郎
印刷者　東京市小石川區久堅町百〇八番地　川市七作
印刷所　東京市小石川區久堅町百〇八番地　博文館印刷所

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

現はれたり勿驚天動地の大旅行記

五大洲探檢家 中村直吉君
冒險世界主筆 押川春浪君
共編

《五大洲探檢記卷の一》

大喝采
忽三版

亞細亞大陸横行

大冒險!!!
大冒險!!!
眞に是れ破天荒の大冒險

踏破す全世界十五萬哩、歲月を費すこと六年有餘、此日本探檢家の足跡は五大洲到る處に印して、歐米の大旅行家顏色なく、前人未發の大發見あり、鬼神も驚く大冒險あり、眞に破天荒の壯快旅行記は之れより續出せんとす、其第一卷として現はれし「亞細亞大陸横行」は、彼が孤劍飄然韓半島に渡り、支那内地を探檢し、進んで暹羅王國に入りし大旅行記にして、奇談百出、何人も快哉を連呼すべき珍書なり。

何人も一讀直ちに驚異の眼を睜らん

▲第二卷南洋印度奇觀（既刊）
▲第三卷には印度大陸踏破の快著現はれん

愛讀者諸君手に汗を握りて待て……

洋裝中判紙數三百頁
十五萬哩世界探檢旅程
地圖及寫眞版九頁挿入
正價金四拾五錢
郵稅金六錢

—（博文館發行）—

怒濤庵江見水蔭君著

冒險小說 大蠻勇

大好評 大歡迎

忽三版

—（全一册 洋裝中判並製美本 紙數五百五十頁 正價金五拾錢＝郵稅金八錢）—

國民の新要求に應じて出でたる文壇の大産物は是なり。從來の冒險小說は餘りに空想的なり、怪談式なり、變化有るが如くにして實は單純なり。著者此蕩套を脱し、新生命を加へたる冒險小說を獨創す。基礎を科學に置き、又文學上の價値を失はざらんことを勉めたるを以て或は雖解の戾れを抱くもあらんが、著者が老熟にして若も活氣を失はざる一流の快文字は、全く此弊を脱却し得たり。故に少年諸君の喝采を博するや論なしと雖も、亦家庭に入りて大人方の賞賛を得るも必せり。殊に大蠻勇の主人公たる緞之助が百難と苦鬪の其間に、南洋航海の遭難、熱帶地孤島の生活、北極近き氷山の跋渉等の記事は悉く實聞に依るを以て、抱腹すべき虛僞を語り、識者の嘲笑を被むるが如き事は、萬無きを信ず。實に是科學と文學とを結び、事實を小說に化したる大成功の新著として江湖に推薦するを憚らざる也。

—（發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館）—

主筆 押川春浪君

冒險世界

毎月一回 五日發行 外に臨時增刊年二回
四六倍判 毎號紙數百二十八頁 油繪三色版一頁並に普通寫眞版四頁挿入

▲冒險世界は何人が讀んでも愉快で堪らぬ雜誌です!!!
▲冒險世界は奮鬪的健兒の友である 墮落鼠輩の敵である!!!
▲冒險世界の口繪は珍奇美麗で讀物は壯快無比である!!!
▲冒險世界には毎號金牌銀牌の奇拔な懸賞問題がある!!!
▲冒險世界は魔の箱の樣だ 中から不思議なものが出る!!!

正價 壹冊 金拾五錢 前郵稅 ●三冊 金四拾七錢五厘
郵稅 金壹錢五厘 金 (共) ●六冊 金九拾四錢
●十二冊 金壹圓八拾參錢

發兌元 東京本町 博文館

此書は英國少年の爲めにチャールス、ラムと其姉メリーとが物したる沙翁物語中特に十篇を撰びたるものにして譯者の意志は廣く我國社會一般に不朽の大著沙翁劇を味はしめん事を庶幾するが故也

文學士 小松月陵君譯
沙翁物語十種
全一冊中判並製 紙數二百九十頁
▲正價金四拾五錢＝郵稅六錢

河井道家子 辻庭子 村小靖 子 共著
ひとりぼっち

本書は千八百九十七年發行エミ、ラフイーバル女史の著にかゝる「水銀のやうに清く獨樂のやうに敏捷な」英國の一少女を主人公として其天眞を枉げず敬虔の念篤き性質を田園生活に於ける短時日の出來事に描寫して紙上に躍如たらしめしもの由來日本の庭小說中稀に見る所と云ふべし躍躍せざるなり女子英學塾教授河井辻村二女史譯述して世に公にす其內容の如きはこゝに喋々するを須ひず

▲全一冊洋裝中判特製紙數三百八十頁
▲正價金六拾五錢＝郵稅金拾錢

——(新版)——

博文館發行(東京本町)

永井荷風君著
あめりか物語

全一冊洋裝中判 紙數四百九十頁 正價金六拾五錢 郵稅金八錢

卷中目次

●船室夜話●野路のかへり●岡の●●醉美人●長髮●春と秋●雪のやどり●林間●惡友●落葉●支那街の記●夜あるき●六月の夜の夢●附錄フランスより●船と車●ローン河のほとり●秋の巷—(新版)—

主筆 押川春浪君

冒險世界

毎月一回 五日發行 外に臨時增刊年二回
四六倍判 毎號紙數百二十八頁 油繪三色版一頁並に普通寫眞版四頁挿入

▲冒險世界は何人が讀んでも愉快で堪らぬ雜誌です!!!
▲冒險世界は奮鬪的健兒の友である墮落鼠輩の敵である!!!
▲冒險世界の口繪は珍奇美麗で讀物は壯快無比である!!!
▲冒險世界には毎號金牌銀牌の奇拔な懸賞問題がある!!!
▲冒險世界は魔の箱の樣だ中から不思議なものが出る!!!

正價 壹冊 金拾五錢 前郵稅 ●三冊 金四拾七錢五厘
郵稅 金壹錢五厘 金 (共) ●六冊 金九拾四錢
●十二冊 金壹圓八拾參錢

發兌元 東京本町 博文館

欠

MISSING

此書は英國少年の爲めにチャールス、ラムと其姉メリーとが物したる沙翁物語中特に十篇を撰びたるものにして譯者の意志は虔く我國社會一般に不朽の大著沙翁劇を味はしめん事を庶幾するが故也

文學士 小松月陵君譯

沙翁物語十種

全一冊中判並製 紙數二百九十頁
▲正價金四拾五錢＝郵稅六錢

河井道子 辻村靖子 共著

家庭小說

ひとりぼっち

本書は千八百九十七年發行エミ、ラフイーバル女史の著にかゝる「水銀のやうに清く獨樂のやうに敏捷な」英國の一少女を主人公として其天眞を抒げず敬虔の念篤き性質を田園生活に於ける短時日の出來事に描寫して紙上に躍如たらしめしもの由來日本の小說中稀に見る所と云ふを躊躇せざるなり乃日女子英學塾教授河井辻村二女史譯述して世に公にす其內容の如きはこゝに喋々するを須ひず

——（新版）——

▲全一冊洋裝中判特製紙數三百八十頁
▲正價金六拾五錢＝郵稅金拾錢

（博文館發行（東京本町））

永井荷風君著

あめりか物語

全一冊洋裝中判 紙數四百九十頁 正價金六拾五錢 郵稅金八錢

卷中目次

●船室夜話●野路のかへり●岡の[illegible]●醉美人●長髮●春と秋●雪のやどり●林間●惡友●蕩恨●寢覺め●夜の女●一月一日●曉●市俄古の二日●夏の海●夜半の酒場●落葉●支那街の記●夜あるき●六月の夜の夢●附錄フランスより●船と車●ローン河のほとり●秋の巷——（新版）——

小說書類

江見水蔭君著 ● **地底探檢記** 全一冊 洋裝 大判 紙數二百四十四頁 正價金四拾錢 郵稅金八錢

同 君著 ● 實地探檢 **捕鯨船** 全一冊 洋裝 大判 紙數二百三頁 正價金參拾五錢 郵稅金六錢

同 君著 ● 軍事小說 **武裝の卷** 全一冊 洋裝 大判 紙數二百四十八頁 正價金貳拾五錢 郵稅金六錢

內田不知庵君著 ● **社會百面相** 全一冊 洋裝 大判 紙數五百五十四頁 正價金五拾五錢 小包料金八錢

樋口一葉女史著 ● **一葉全集** 全一冊 洋裝 大判 紙數四百八十六頁 正價金四拾錢 郵稅金八錢

博文館發行

五大洲探檢家
中村直吉著述

南米ニ行ケ！

正價金五拾錢
郵稅六錢

◎近々出現
▲最新地圖附帶

本書ハ著者ガ南米十ケ國ヲ跋渉シ商工業及殖民地ヲ親シク觀察セシ實情ニ調査ニ依リ今回特ニ述ノ次第ハ先ツ擴莫タル肥沃ノ原野ヲ自由ニ開發シ得ルヲ指導シ而シテ其レヨリ起ル工業ノ原料ハ無論不毛ノ地下ニ在ル黃白ハ五億萬ノ移民ヲ歡迎スベキ確證、日本人ニ適スル業務、人情、風俗、生活、勞働賃銀、及、地理、氣候、航海經費、渡航規則、入國、手續、等其他未ダ日本ニ著述無キ最モ有益ナル記事ニヨリ成ル荷モ南米渡航ヲ欲スル者及事情ヲ知ラントスル士ハ活眼ヲ開キ此ノ一バー、スークレー、兩雄ノ靈ヲアンデス山頭ニ弔ヒ而シテ天下無比ナル無限ノ寶庫ヲ破レ

南米案內

大陸ニ進軍シ勇將ポリヲ讀ミ決然立ツテ南米

南米ニ行ケ!!!

ヲ編ス編

發行所 東京神田南神保町拾番 **南米協會**（特ニ海外渡航部置）

發賣 東京本町 **博文館**

60.

95
74

95
74
M